

石見町文化財調査報告書 第16集

一般県道皆井田江津線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

せい げん な  
**清源那遺跡**

1998年3月

石見町教育委員会

## 序

石見町教育委員会では、島根県川本土木建築事務所の委託を受けて、平成7年から平成10年にかけて一般県道皆井田江津線道路改良工事予定地内の遺跡調査を行ってまいりました。本報告書は平成8年度に実施した「清源那遺跡」の調査結果をとりまとめたものです。

この「清源那遺跡」は、石見町だけでなく邑智郡の歴史を語る上で欠くことのできない中山古墳(墳墓)群の最北端に位置しています。また、本遺跡の周辺からは縄文土器の破片や銅鐸2口が出土しており、古代から脈々と続く人の営みが確認されております。

今回の調査により、住居跡10棟、土壙墓31基、石棺墓1基が確認できました。住居については、古代から中世にかけてのものが幾重にも重なって存在し、また、土壙墓群については、古代から近世にかけてのものが年代ごとに集積しており、集落跡の意味合いを深めております。

このように、周辺遺跡を含めてこの「清源那遺跡」を鑑みますと、中山古墳(墳墓)群を中心としたこの地域一帯における発展の過程を学習していく上で、ひとつの指針となり得る貴重な遺跡であることは間違いありません。

ここに発掘調査報告書を発刊するにあたり、調査にお力添えをいただきました関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

石見町教育委員会

教育長 山本繁文

## 例　　言

1. 本書は、一般県道皆井田江津線道路改良事業に伴い、石見町教育委員会が実施した清源郡遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査の組織は次のとおりである。

調査主体 石見町教育委員会

調査員 寺脇 隆彦（石見町教育委員会課長補佐）

調査補助員 大橋 覚（石見町教育委員会主事）

原 拓矢（石見町教育委員会主事）

調査指導 田中 義昭（島根大学法文学部教授）

吉川 正（島根県文化財保護指導員）

事務局 山本 繁文（石見町教育委員会教育長）

三宅 幸徳（石見町教育委員会社会教育課長）

遺物整理 松川 小枝（臨時職員）、松川 恒子（臨時職員）、下橋 貴子（臨時職員）

大屋由香里（臨時職員）、木村 智彦（臨時職員）

発掘参加者 坂根 和子、横山ヨシノ、原野千恵子、石橋佐和子、大屋カズヨ、吉川サグエ、

高畠 重幸、岩根 久枝、上田嘉津枝、寺本 孝行、駅場 豊子、大野 芳典、

半田 修三、上田 祐士、鳥居 仁志

3. 出土した人骨の分析鑑定は、鳥取大学医学部教授の井上貴央氏に依頼し、その原稿を掲載した。

4. 出土した須恵器・陶磁器については、島根県教育庁文化財課主幹の西尾克己氏、同 文化財保護主事の柳浦俊一氏、島根大学法文学部人文社会研究科学生の細田美樹氏に鑑定を依頼した。

5. 発掘調査及び遺物鑑定に際しては、以上の方々には、多大なご教授ご協力をいただいた。記して感謝したい。

6. 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SI—堅穴住居、SB—掘立柱建物跡、SK—土壙、SD—溝状遺構、P—ピット

7. 掘図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。矢印(N)も同様な方向を示す。

8. 本書の執筆・編集は、田中義昭の指示のもと寺脇、大橋、原が行い、大橋、原が全体の補訂と調整を行った。執筆者は、各章の末尾の( )内に表示した。

9. 遺物の実測は、大橋、原、井上喜代女、福原恭子、浅野智子、田中直美があたり、遺物写真は原、大屋が撮影した。

10. 本調査で出土または採取した遺物及びこれに係る実測図・写真は、石見町教育委員会で保管している。

11. これをなすに当たり関係各氏のご教示に対して謝意を表する次第である。

島根県邑智郡石見町

一般県道皆井田江津線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

清源那遺跡

序 文

	頁
第1章 調査にいたる経緯	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章 調査の概要及び遺構・遺物	11
1. 調査の概要	
2. A区の調査	
3. B区の調査	
第4章 まとめ	37
付 論 清源那遺跡出土人骨について	59

## 挿図・図版・表目次

第1図 石見町位置図	2
第2図 調査対象地と周辺の遺跡	3
第3図 清源那遺跡と周辺の地形	5
第4図 調査前地形測量図	6
第5図 A区調査後地形測量図	7
第6図 B区調査後地形測量図	9
第7図 A区T 1 土層断面図	11
第8図 A区P 1・P 2 実測図	12
第9図 A区S I - 0 1・S B - 0 1 実測図	13
第10図 A区S I - 0 2 実測図	15
第11図 A区S I - 0 3 実測図	16
第12図 A区S K - 0 1 実測図	16
第13図 A区S X - 0 2 実測図	17
第14図 A区S X - 0 3 実測図	18
第15図 A区S X - 0 4 実測図	18
第16図 B区S I - 0 1 実測図	21
第17図 B区S I - 0 2 実測図	21
第18図 B区S I - 0 3 実測図	22
第19図 B区S I - 0 4 実測図	23
第20図 B区S I - 0 5・S I - 0 6 実測図	26
第21図 B区S K - 0 2 実測図	28
第22図 B区S K - 0 3 実測図	28
第23図 B区S K - 0 5 実測図	29
第24図 B区S K - 1 2 実測図	29
第25図 B区S K - 1 4 実測図	30
第26図 B区S K - 1 6 実測図	30
第27図 B区S K - 1 8 実測図	31
第28図 B区S K - 1 9 実測図	31
第29図 B区S K - 2 5 実測図	32
第30図 B区S K - 2 6 実測図	32
第31図 B区S K - 2 8 実測図	33
第32図 B区S K - 3 0 実測図	33
第33図 B区S K - 3 1 実測図	34
第34図 B区S K - 3 1 遺物出土状況	35

第35図 A区S I - 0 1 出土遺物実測図	39
第36図 A区S I - 0 1 出土遺物実測図	40
第37図 B区S I - 0 1 山土遺物実測図	41
第38図 B区S I - 0 2 出土遺物実測図	41
第39図 B区S I - 0 4 出土遺物実測図	42
第40図 B区S I - 0 4 出土遺物実測図	43
第41図 B区S I - 0 6 出土遺物・住居に伴わない遺物実測図	44
第42図 表探遺物実測図	45
第43図 表探遺物実測図	46
第44図 B区SK - 3 1 出土遺物実測図	47
第45図 出土陶磁器実測図	48
第46図 出土陶磁器実測図	49
第47図 出土陶磁器実測図	50
第48図 石器・鉄製品実測図	51

- 図版1 a.上空から見た調査地周辺 b.同 調査対象地全景  
 図版2 a.A区発掘前全景 b.同 T 1 土層断面  
 図版3 a.A区S I - 0 1 検出(北から) b.同 調査中(北から) c.同 土層断面(南西から)  
 図版4 a.同 遺物出土状況(南から) b.同 遺物出土状況近景(西から)  
     c.同 高坏出土状況  
 図版5 a.同 鉄盤出土状況 b.同 磚出土状況 c.同 壁溝・P 1・P 2 検出(北西から)  
 図版6 a.同 壁溝・柱穴検出近景(南西から) b.A区S B - 0 1 近景(北東から)  
     c.A区S I - 0 1・S B - 0 1(北西から)  
 図版7 a.A区S I - 0 2・S X - 0 1 検出(北東から) b.同 上層断面(東から)  
     c.A区S I - 0 3 調査中(北西から)  
 図版8 a.同 土層断面(西から) b.A区S D - 0 2 検出(北東から) c.同 土層断面(北東から)  
 図版9 a.A区SK - 0 1 検出 b.同 調査中 c.A区S X - 0 2 近景  
 図版10 a.同 遺物出土状況 b.A区S X - 0 3 土層断面 c.同 完掘(北西から)  
 図版11 a.A区S X - 0 4 土層断面 b.同 完掘(北西から) c.A区調査後全景(北から)  
 図版12 a.B区2段目東側土層断面 b.同 西側土層断面 c.B区S I - 0 1 検出(北西から)  
 図版13 a.同 土層断面(北東から) b.同 遺物出土状況 c.同 須恵器出土状況  
 図版14 a.同 煙道中遺物出土状況 b.同 煙道調査中(南東から) c.同 完掘(北西から)  
 図版15 a.B区S I - 0 2 遺物出土状況(南から) b.同 遺物出土状況(東から)  
     c.同 完掘(北から)  
 図版16 a.B区3段目調査中全景(南東から) b.同 全景(北東から) c.B区S I - 0 3 煙道検出  
 図版17 a.同 調査中(北西から) b.同 完掘近景(北から) c.B区S I - 0 4 検出(北西から)  
 図版18 a.同 遺物出土状況(北西から) b.B区S I - 0 5 調査中(北から) c.同 燒土近景

- 図版19 a.B区S I - 0 6(西から) b.同 遺物出土状況近景 c.同 完掘近景(西から)
- 図版20 a.同 床下石斧出土状況(北西から) b.同 床下石斧出土状況近景  
c.同 北斜面鉄斧出土状況近景
- 図版21 a.B区1段目土壤墓検出(東から) b.B区S K - 1 9 検出(南から)  
c.B区S K - 1 8 河原石出土状況
- 図版22 a.同 底面河原石検出 b.B区S K - 1 9 底面棺跡検出  
c.B区1段目調査後全景(南東から)
- 図版23 a.B区2段目土壤墓検出 b.B区S K - 0 2 調査中(北西から)  
c.同 人骨出土状況(南から)
- 図版24 a.B区S K - 0 3 調査中(南西から) b.同 人骨出土状況(北東から) c.同 棺跡検出
- 図版25 a.B区1段目・2段目調査後全景(北東から) b.B区S K - 2 8 遺物出土状況  
c.B区S K - 2 3 骨壺出土状況
- 図版26 a.B区S K - 3 1 検出 b.同 土層断面(西から) c.同 石棺(西から)
- 図版27 a.同 須恵器出土状況(東から) b.発掘作業風景 c.文化財教室風景
- 図版28 A区S I - 0 1 出土遺物
- 図版29 A区S I - 0 1 出土遺物
- 図版30 a.B区S I - 0 1 出土遺物 b.B区S I - 0 2 出土遺物
- 図版31 B区S I - 0 4 出土遺物
- 図版32 B区S I - 0 4 出土遺物
- 図版33 B区S I - 0 4・S I - 0 6 出土遺物
- 図版34 B区S I - 0 6 出土遺物、住居に伴わない・表採遺物
- 図版35 表採遺物
- 図版36 表採遺物
- 図版37 B区S K - 3 1 山上遺物
- 図版38 出土陶磁器
- 図版39 出土陶磁器
- 図版40 出土陶磁器
- 図版41 a.出土石器・鉄製品 b.B区S K - 0 2 出土遺物
- 図版42 毛髪電子顕微鏡写真

第1表 A区出土遺物.....	52
第2表 B区出土遺物.....	53
第3表 山上陶磁器.....	57
第4表 山上石器・鉄製品.....	58

## 第1章 調査にいたる経緯

**清源那遺跡**は、島根県邑智郡石見町大字井原1223番地外にある。平成3年12月に開通した高速自動車道(中国横断自動車道広島浜田線)に接続するため、新たに県道市木井原線が開設された。これに伴い、一般県道皆井田江津線において道路の改良工事が計画され、島根県川本土木建築事務所より石見町教育委員会に遺跡の分布調査の依頼があった。

平成7年10月に分布及び試掘調査を行った結果、須恵器片、土師器片、陶磁器片の散布が確認されたため、「散布地」として遺跡の発見届けが島根県川本土木建築事務所より提出された。

遺跡名は、字名から清源那遺跡とした。平成8年1月に本遺跡の発掘調査についての依頼が川本土木建築事務所からあり、協議した結果、平成8年4月から石見町教育委員会において本調査を実施した。

(寺脇隆彦、大橋 覚、原 拓矢)



—清源那遺跡全景(北西から)—

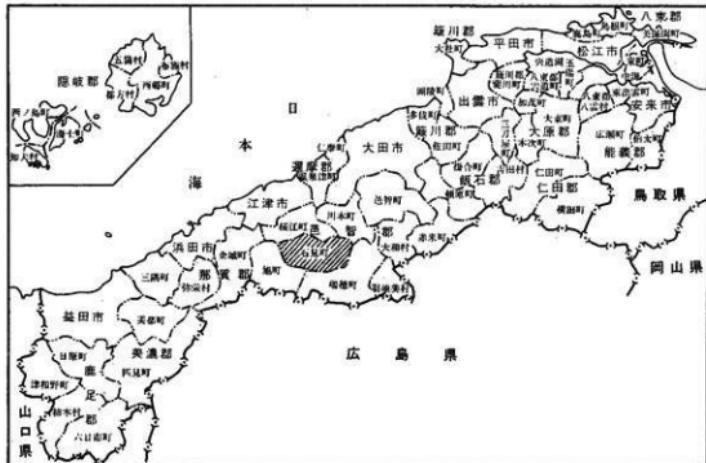
## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

島根県邑智郡石見町は、島根県のほぼ中央に位置している。近隣の町村は、北を川本町と桜江町、南は瑞穂町が接している。町の北東部には陰陽を結ぶ幹線である国道261号線が継続し、町中央部には県道皆井田江津線が横断している。地形的にみれば、町中央部に京太郎山があり、同山から延びる稜線によって南に於保地盆地(矢上盆地)、西に日賀山峠、北に日和盆地に区分され集落が形成されている。

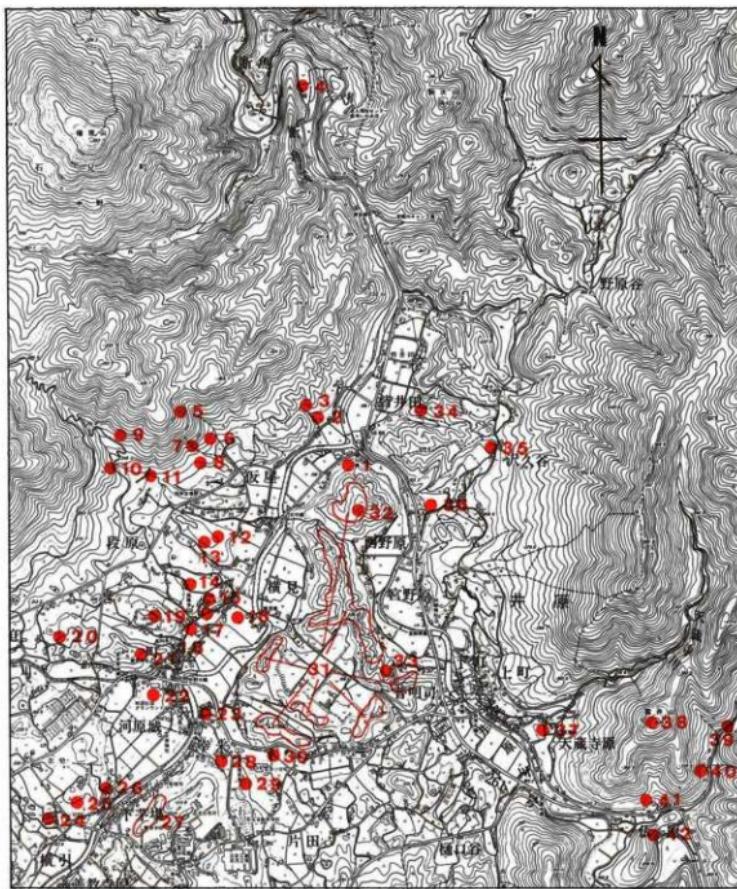
於保地盆地は、平地の少ない石見山間部にあって比較的恵まれた地形である。この地域は、標高150mから300mに開けた耕地約565ヘクタールを有する農業中心の地域である。昭和40年代より行われた土地改良事業により、盆地内の90パーセント以上の耕地が圃場整備されている。これらの耕地は、山丘をぬって流れる矢上川、井原川、濁川と、それらの支流により開拓された河谷に開かれている。

この地方は、黒雲母花崗岩が風化した真砂土が露出しており、中世から近世にかけて大規模な砂鉄採取が行われた地域といわれている。そのことは製鉄関連遺跡が多く確認されていることからも首肯できる。盆地内に点在する小山は砂鉄採取による鉄穴流しで形成された残陵が多く、明治中期まで続いた採掘により現在でも「矢上禿」として名残を止めている。また、「濁川」の名前も鉄穴流しで出る濁り水からその名が付けられたと言われている。

今回調査した清源那遺跡は、於保地盆地の北東に位置する井原地区に所在する。地形的にみると、盆地中央を流れる矢上川と井原川に挟まれる東明寺山より延びた丘陵の北端部分に位置する。



第1図 石見町位置図



第2図 調査対象地と周辺の遺跡

1. 清源那遺跡
2. 横ヶ迫遺跡
3. 小松屋遺跡
4. 築堀遺跡
5. 大元追鉢跡
6. 坂屋古墳群
7. 田の迫鉢跡
8. 田の迫原遺跡
9. 萩原横手1号鉢跡
10. 萩原横手2号鉢跡
11. 段原古墳群
12. 坂屋銅鐸出土地
13. 反原遺跡
14. 反原遺跡
15. 旦原1号遺跡
16. 池ノ尻遺跡
17. 旦原2号遺跡
18. 中原遺跡
19. 源太ヶ城跡
20. 風呂ヶ谷遺跡
21. 貢茂山古墳群
22. 余勢野原遺跡
23. 和泉原遺跡
24. 松山遺跡
25. 坂木屋遺跡
26. 余勢遺跡
27. 下川原遺跡
28. 鳥居の段1号遺跡
29. 鳥居の段2号遺跡
30. 片田遺跡
31. 中山古墳(墳墓)群
32. 稲積城跡
33. 平城跡
34. 実藤古墳
35. 庄塚古墳
36. 岩風呂遺跡
37. 天藏寺原遺跡
38. 雲井城跡
39. 岩井谷II鉢跡
40. 岩井谷III鉢跡
41. 城山鉢跡
42. 仏一原鉢跡

本遺跡周辺に所在する遺跡は、時代ごとに以下のとおりである。

＜縄文時代＞ この時代を代表する遺跡としては、縄文後期の福田KII式に属する異型壺型土器の完形品が出土している築廻遺跡がある。濁川の下流にあたる県立自然公園断魚渓内に所在する稻荷神社付近からこの遺物が出土したと伝えられるが、その場所は必ずしも定かではない。後に土木工事に伴い水田部分の一部を調査したが、遺構及び遺物等の成果をあげられなかった。

＜弥生時代＞ この時代の遺跡には、中野地区の余勢野原遺跡を中心として、和泉原遺跡、松山遺跡、森の下遺跡、名子山遺跡、仮屋銅鐸出土地がある。特に清瀬那遺跡から西へ余勢野原周辺にかけて大規模な集落が形成されていた地域との聞き込みもあり、立地からもその可能性が高い。また、大正3年に中野地区的仮屋で二口の銅鐸が発見され、余勢野原遺跡からは弥生土器が多量に出土している。加えて、近年の中山古墳(墳墓)群の調査で、弥生時代の墳墓が含まれていることが確認されている。以上のことから、この地域が弥生時代から古墳時代にかけて於保地盆地の中心に位置していたと考えられる。

＜古墳時代＞ 井原地区と中野地区にまたがる丘陵に中山古墳(墳墓)群がある。平成7年から実施している分布調査により、130基を越す弥生時代から古墳時代にかけての人規模な古墳(墳墓)群を確認している。また、中山古墳(墳墓)群と同時代と推定する下川原遺跡がある。この遺跡は、中山丘陵の延長線上にほぼ同じ標高で存在している。遺構としては、箱式石棺を主体部にもつ古墳、横穴墓を確認している。

このほか段原古墳群、仮屋古墳群、賀茂山古墳群、割田古墳、塔の本古墳、後原古墳の諸墳が点在している。以上のことから、この時代は、矢上川周辺部にまとまった単位として集落が存在していたといえるのではなかろうか。

＜中世以降＞ 中世の遺跡としては、今回調査を実施した清瀬那遺跡の北側の稜線上に、稻積城、平城がある。その他、矢上川を挟んで源太ヶ城、余勢城がある。伝承によれば、余勢城、源太ヶ城はいずれも戦国時代福屋氏の配下にあった武将の拠点であり、永禄4(1561)年の吉川勢との合戦で落城したと伝えられている。いずれにしてもこの時代を明らかにすることはほとんどなされていない。

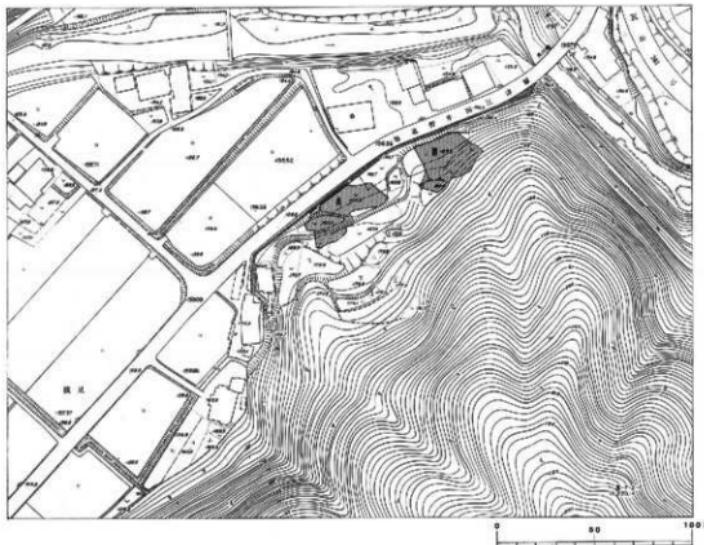
(寺脇隆彦、大橋 覚、原 拓矢)

### 【参考文献】

- ・石見町『石見町誌』上巻 1972年
- ・石見町教育委員会『石見町の遺跡』 1983年
- ・石見町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』 1991年
- ・石見町教育委員会『中山古墳群発掘調査概報』 1977年
- ・石見町教育委員会『中山古墳群発掘調査報告書』 昭和57年
- ・石見町教育委員会『中山古墳群発掘調査報告書 第3次』 1989年
- ・石見町教育委員会『日和城跡調査報告書』 1996年
- ・瑞穂町教育委員会『瑞穂町誌』第三集 1976年
- ・鳥取県教育委員会『増補改訂 鳥取県遺跡地図 II(石見編)』 1992年

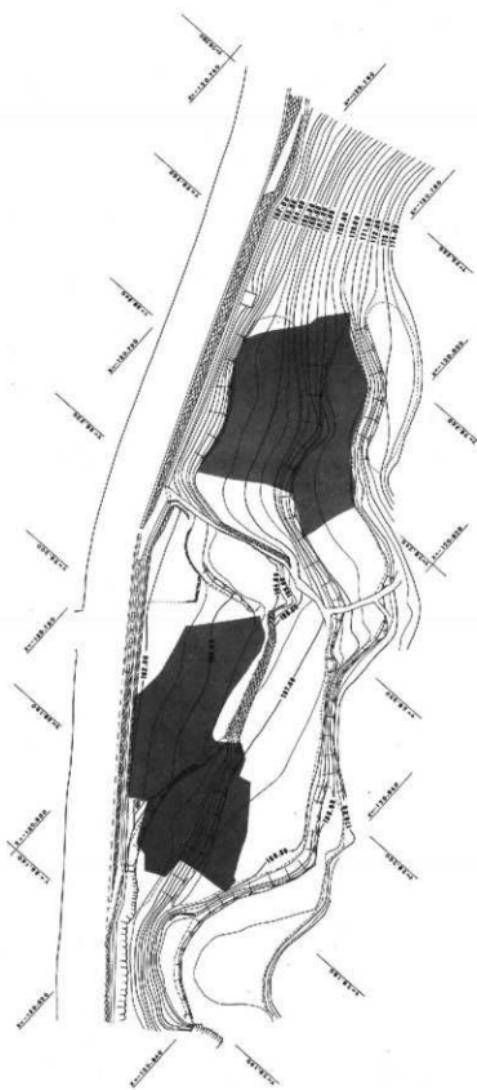


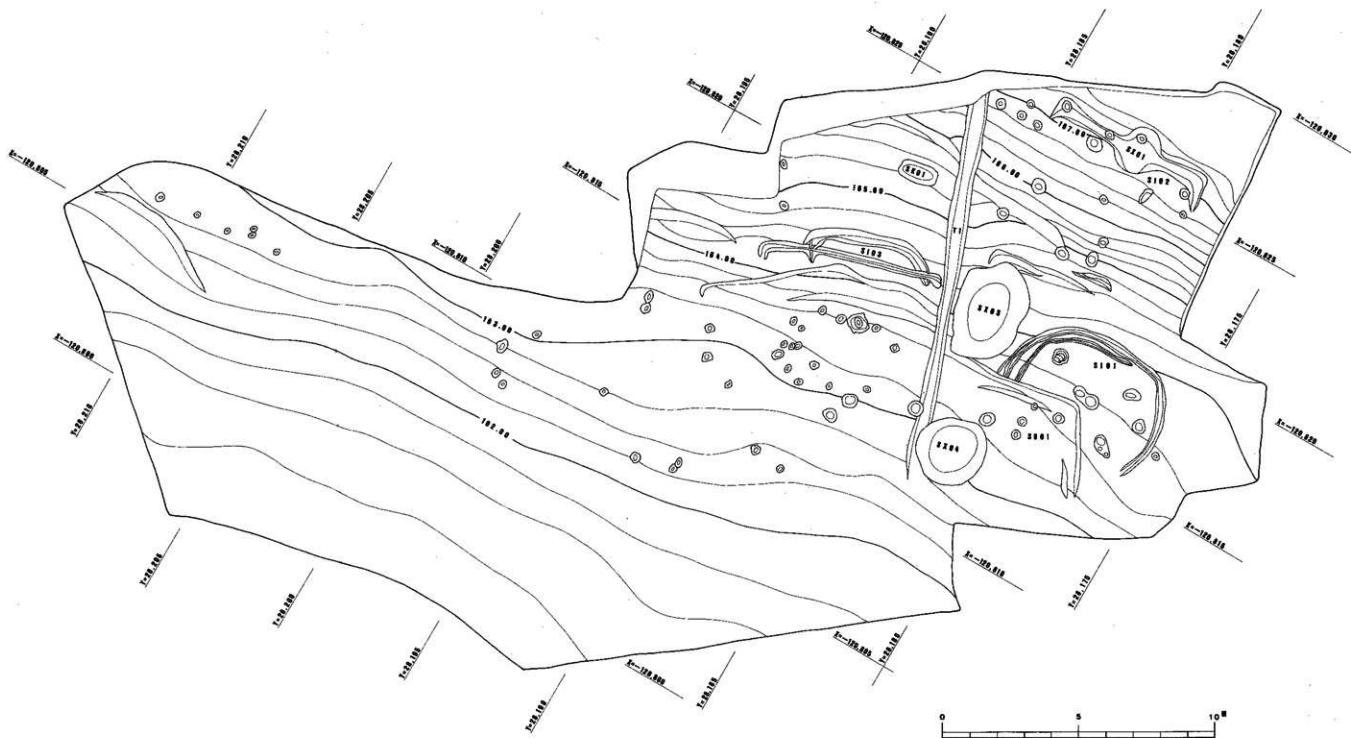
清源那遺跡周辺航空写真（井原地区から中野地区を望む）



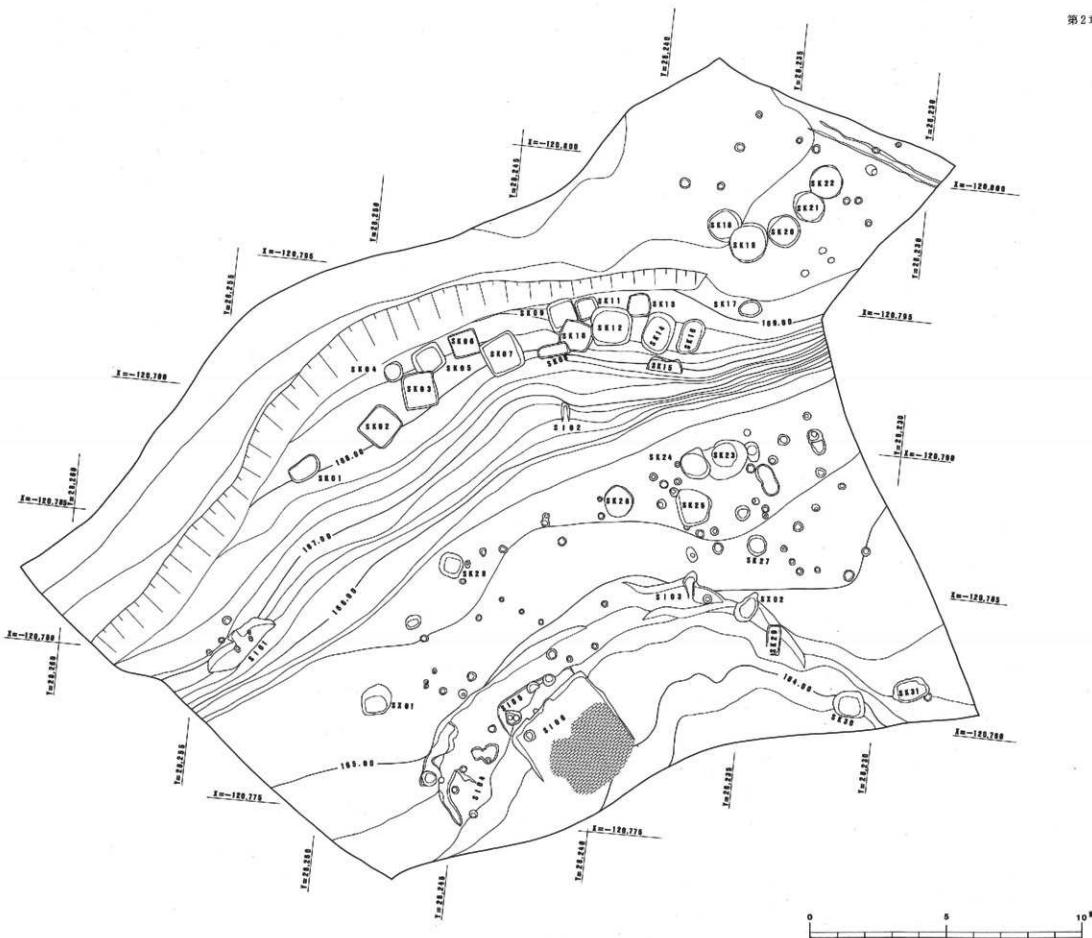
第3図 清源那遺跡と周辺の地形

第4図 脚臺前地形測量図





第5図 A区調査後地形測量図



第6図 B区調査後地形測量図

## 第3章 調査の概要及び遺構・遺物

### 1. 調査の概要

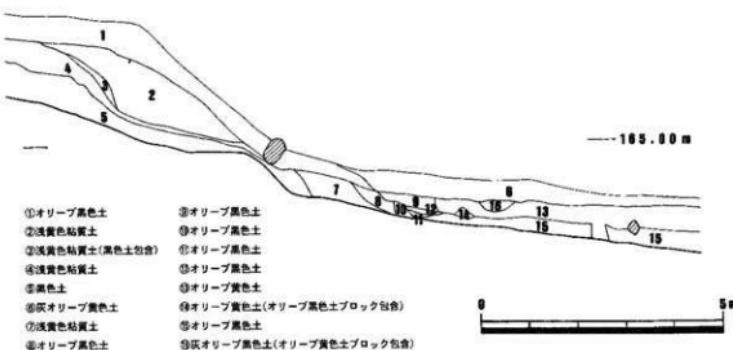
清源那遺跡は、石見町の井原地区と中野地区にまたがる独立丘陵である中山丘陵の北斜面に所在する。この丘陵は、石見町の中央となる於保知盆地の東北端に位置し、南北に延びる約1.8kmの主脈と、それに伴う支脈から成っている。丘陵上に立地する中山古墳(墳墓)群は支脈ごとにA～Fの6地区に分かれ、今回調査した清源那遺跡は最北端であるE地区に位置している。

本遺跡は、道路改良工事に伴う分布調査で所在が判明し、その後平成7年10月23日から10月25日にかけて行った試掘調査で確認された。今回の調査は、試掘調査の結果により約2,000m<sup>2</sup>を調査範囲とした。現況は斜面を段状に加工した畑で、北側を県道皆井田江津線が走っている。A区南にある一番高い段の標高約167.5m、低い段で約162.5mあり、遺跡と道路との比高は約2.5～9mである。調査区中央には小さな谷があり、この谷を挟んで西側をA区、東側をB区として調査を実施した。以下A、B区の調査と検出遺構ならびに出土遺物について述べる。

### 2. A区の調査

A区の調査面積は約710m<sup>2</sup>である。現況は谷を埋めて造成した東西に平坦面をもつ段状の畑である。調査は重機で耕作土と畑造成時の埋土(第2層浅黄色粘質土層)を除去し、IH地形を検出して精査した。精査の結果、遺構は、谷部分には存在せず、調査区の西南部分に集中して検出された。遺構群の内容は、段状遺構、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壤墓、ピット群である。

なお、第4図A区調査後地形測量図のT1は土層確認のためのトレンチである。また土層断面については、第7図に示している。



第7図 A区T1土層断面図

## 1) S I - 01(第9図、図版3~6)

## [検出状況]

この遺構は、T 1 東側にある南西斜面下の平坦面で検出され、楕円形をなす柱穴住居址と判定された。検出過程は以下のように述れる。

まず、埋土を除去した段階で壁と壁溝及び床面を捉え、それらの広がりを追求した。その結果、壁と壁溝の北側は大きく失われており、それが S B -01 の構築による破壊に基づくものと判断した。

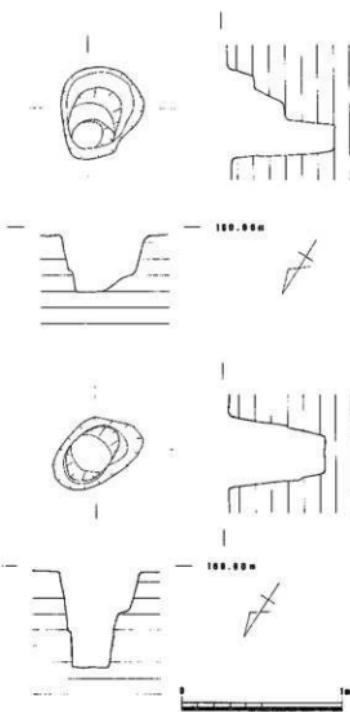
壁下を巡る溝のほかに、この溝とほぼ同心円状に巡るもう一条の溝が壁に接して残されていることが知られた。これは、住居が拡張されたことによる結果と考えられた。

床面には5個のピット(P 1~P 5)が認められたが、うち柱穴とみられるのは P 1、P 2、P 4 である。P 4 は3個の穴が重複しており(それぞれ P 4-1、P 4-2、P 4-3とする)、住居の改築に伴って柱の移動が行われたことを示すと思われる。同様なことは、P 1 及び P 2(第8図)では柱穴中の床面下35cmの箇所に段があり、そのレベルが P 4-1 とほぼ同一レベルになることから、これも柱穴の立て替えによるものと判断された。

こうした事実も内側の溝をもつ住居が外側の壁及び壁溝をもつ住居に拡大されたことを物語る。以下、前者を S I - 01a、後者を S I - 01b とする。なお、第4番目の柱穴としては S B - 01 の床面で検出された P 6 と P 7 が該当するとみられる。これらのピットの底面レベルが P 1、P 2、P 4 のそれとほぼ同一であることから首肯される。その際、当然のことながら、P 6 が S I - 01b のものに、P 7 が S I - 01a に属することになる。

## [平面・断面図]

S I - 01a は、平面形が楕円形ないし小判形を呈する。北東部に当たる3分の1程度は S B - 01 によって破壊されている。東西に主軸を置き、その長さは6.1mを測る。短軸は5.3mと復元できる。壁の高さは50~60cmである。主柱穴は、P 1、P 2、P 4、P 6 となる。床面中央にある P 5 は長軸方向に眼鏡状を呈しているが、これは、いわゆる中央ピットが住居拡張に伴って東に移設された結果と考えられる。深さは床面よりそれぞれ-9cm、-6cmであり、穴壁は火を受けて赤く焼けていた。西壁に近い P 3 も浅く、床面より-5cmを測る。このピットは性格不明である。本住居址に伴う壁溝は、幅13~20cm、深さ4~13cmである。



第8図 A区P1・P2実測図

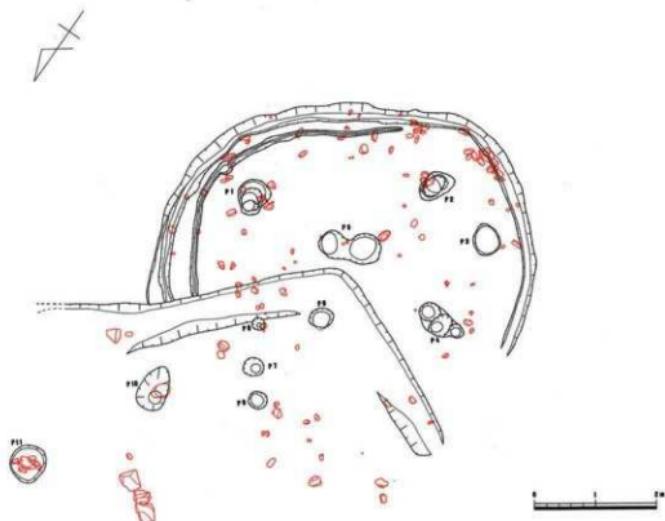
S I -01bの平面形は隅円長方形に近い。長軸の方向はS I -01aと同様である。規模は長軸が約5.5m、短軸が約4mと計測できる。主柱穴はP 1、P 2、P 4-1、P 7となる。中央ピットはP 5の西側のピットが該当する。本住居址に伴う壁溝は幅6~12cm、深さ4~7cmである。

#### [出土遺物]

住居址(S I -01a)に伴うと考えられる遺物は、概ね該当する草田6期のものが大部分を占める。覆土中からは土師器、土師質土器、須恵器、瓦質土器が検出された。その他、床面2ヶ所で礫がまとめて検出されている。

#### 住居址に伴う遺物(第35図2~5・8・9・12~15・第36図20、図版28・29)

2は複合口縁の壺である。口縁部は強く外反しており、端部に平坦面をつくり、そこに浅い1条の沈線が残る。3は複合口縁の甕で、比較的短い口縁部をもち、端部を外方に軽く折り曲げる。複合部はあまり突出しない。4は口縁部がゆるい「く」の字状に屈折する。口縁端部に平坦面をもち、肩部にクシ状工具による沈線文を施す。5は口縁端部に平坦面をつくり、口縁部が「く」の字状に強く屈折する。8は高环で、体部から口縁端部にかけてゆるやかに広がるやや深い环部をもつ。これに接合する脚部はほとんどが失われ、詳細不明である。また、环底部の裏面に脚接合時の中心点とされる小孔が穿たれている。9は甕の破片で、口縁部を強く外反させ、端部に平坦面をもつ。12は大型壺の上胴部の破片で、外面は細いタテハケメの後ヘラによる羽状文を施す。内面の調整は風化により確認できない。13は壺の頸部から胴部にかけての破片である。口縁部は「く」の字状の屈曲を残す。胴中部の器壁は胴上部と比較して薄い作りである。14は甕の胴部上半である。器壁は全



第9図 A区 S I -01 + SB -01 実測図

体的に薄い。15は壺の底部である。丸底様の平坦面を残し、胴部に向けてゆるやかに立ち上がってい。20は壺の胴部下半である。

以下はS I -01覆土(上面からの流入土)中から検出された。

#### 土師器、土師質土器(第35図1・7・10・第36図16・18・19、図版35・36)

1は丸底の壺である。底部から口縁部にかけて湾曲している。端部はやや外反させ丸くおさめている。7は口縁部がゆるい「く」の字状に屈曲しており、端部を丸くおさめている。10は壺で、弓状に外反する口縁をもち、端部に沈線を施す。これらは、住居址床面の土器群とセットになると思われる。16は土師質土器の壺である。底部は肥厚しており、体部から口縁端部にかけて比較的薄くゆるやかに広がっている。18は壺の底部である。底部から逆「ハ」の字状に内湾気味に立ち上がり、体部にかけて強く外反している。19は高台をもつ壺底部で、壺底面には回転糸切り痕が認められる。高台は高く「ハ」の字状に開く。

#### 須恵器(第36図21~26、図版29)

21は高台をもつ壺底部の破片である。22は壺の底部片で、高台が付いていた痕跡が認められる。23は小型の壺片で、体部が大きく外反している。壺底面に糸切り痕が認められる。24は低い高台の付く壺底部である。底面に回転糸切り痕が認められる。25は壺の破片で、口縁を直立して、断面二角形の突帯をめぐらす。26は大型壺の胴部破片で、外面は縄日のタタキ痕、内面には同心円状の宛て具痕がみられる。

#### 瓦質土器(第35図6、図版28)

6は壺の口縁部片で、端部を肥厚させ外側に折り曲げている。

#### 2) S I -02(第10図、図版7)

##### [検出状況]

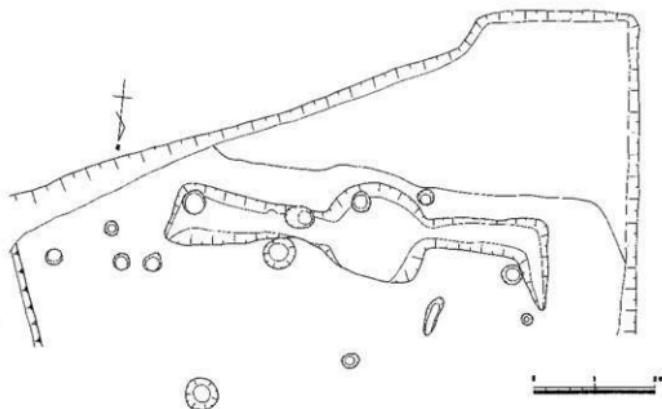
この遺構は、T 1 西側の南西斜面上部より検出された。検出面では幅1m、長さ6.2mの溝状遺構として確認したものである。この溝と重複するピット3個(P 1・P 2・P 3)と溝周辺にピット3個(P 4・P 5・P 6)、溝の中央部に径約2mほどの土坑(S X-01)が検出された。また、この遺構の南(山手)側50cm後方に地山をカットした東西方向の段を確認した。これら十坑及びピット3個は溝状遺構と重複しており、上層観察からも、後世の遺構が覆土上から掘り込まれた結果と判断された。

次に埋土を除去した段階では、溝が東西両端でL字状に屈折することが判明したこと、この溝は方形の竪穴住居の一部と考えられた。これをS I -02とする。

溝の幅約60cm、深さは検出面から10~20cmである。地山の東西方向の段はこの溝と平行に設けられているので本住居址に伴う遺構と捉えておきたい。S I -02に伴う遺物は検出されなかった。

##### [平面・断面形]

S I -02の北側は、流出したのか大部分が失われている。平面形は一辺6mの方形を呈すると思われる。S X-01の底面と壁溝の底面は同レベルである。住居の柱穴はP 6 ではかのピットは住居に伴うものではないと考えられる。地山の平坦面から住居址検出面までの高さは30cm、壁溝部分は幅35~65cm、検出面からの深さ約20cmである。



第10図 A区S I - 02 実測図

## 3) S I - 03(第11図、図版7・8)

## [検出状況]

この遺構は、T 1 東側の南斜面下部より検出された。埋土を除去すると2段の平坦面が認められ、いずれも住居の一部と判断される。そのうち上段の平坦面部分をS I - 03とした。

S I - 03の床面上では2本の溝状遺構(S D - 01・S D - 02)が検出された。S D - 01は本住居址の壁の掘り込みと平行しており、本住居址に伴うものと考えられる。S D - 02は、土層観察から、下段と同じ埋土が入り込んでおり、本住居址と時期を同じくするものではなく、むしろ2段目の遺構に伴うものと考えられる。さらにS I - 03を削り込んだ溝状遺構(S D - 03)がS D - 02に沿って平行して掘り込まれている。

## [平面・断面形]

本住居址の形状及び規模は、斜面の流失(または2段目遺構による削り込み)により確認できない。検出面から約45cm下に床面があり、その掘り込みに沿うように幅15~20cm、深さ5~10cmの壁溝が巡っている。上段の平坦面より約70cm下方にS D - 03がある。この溝の性格は不明である。

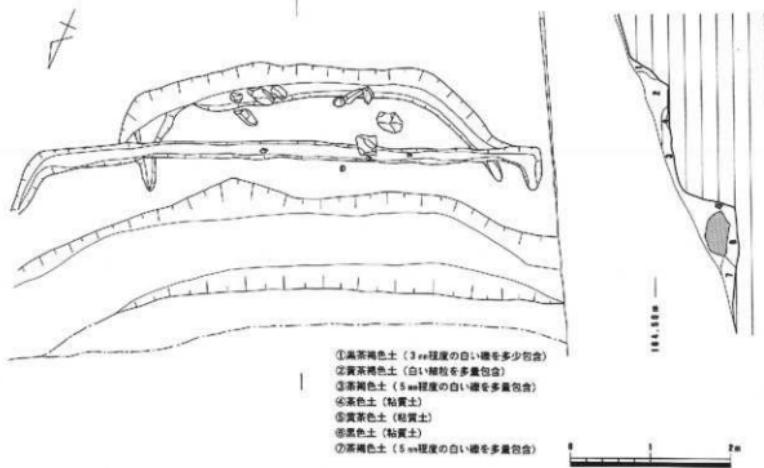
## [出土遺物]

S I - 03床面より須恵器片、S D - 02底面より須恵器片と鉄片が出土しているが、小片のため型式等は判別できない。

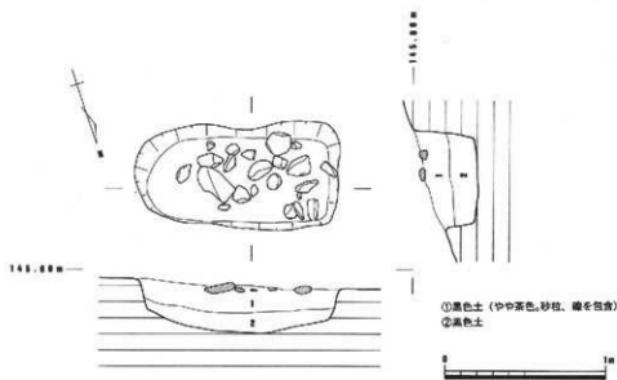
## 4) S B - 01(第9図、図版6)

## [検出状況]

この遺構はT 1 東側にある南西斜面下の平坦面で検出された。S I - 01の精査時に、L字状に屈曲している延長約7mの溝状遺構と直線状に並ぶビット4個(P 9・P 10・P 11・P 12)を確認した。溝状遺構はP 9を中心にして屈曲しているが、東西方向の溝がこれらビット群と平行していない。このことから、溝状遺構はS B - 01に伴うものではないと考えられる。また、これらビット群の間



第11図 A区 S I - 0 3 実測図



第12図 A区 SK - 0 1 実測図

隔は約2.6mとほぼ等間隔になっていることから、主柱穴と考えられる。

[平面・断面形]

柱穴は、流出によって建物南側の4個しか確認できなかった。そのため、規模は確定できない。柱穴の径約40cm、深さ約40cm、柱間隔約2.6mである。

5) SK-01(第12図、図版9)

[検出状況]

この遺構はT1東側の南斜面で検出された。遺物は検出されなかつたが、5~20cm大の礫が20個検出された。

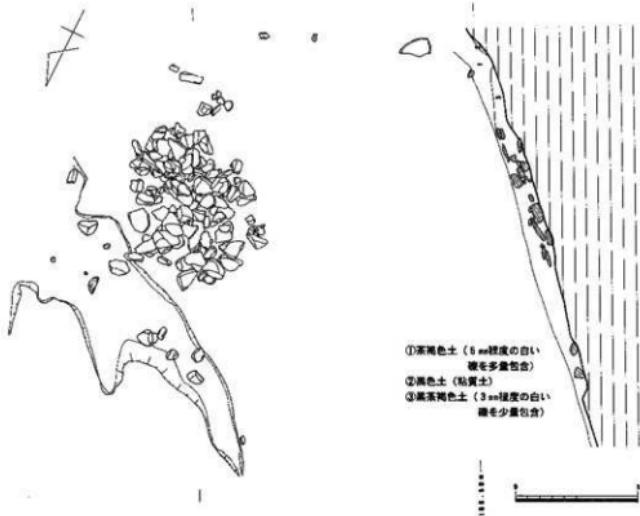
[平面・断面形]

SK-01は長径約1.2m、短径約0.6mの円長方形様土壙墓である。検出面から墓壙の深さは約40cmである。土層観察から木棺の痕跡は確認できなかつた。

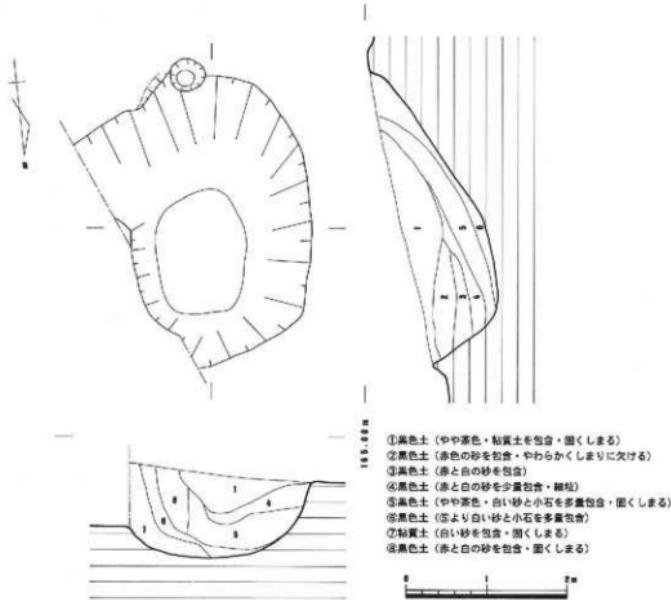
6) SX-02(第13図、図版9・10)

[検出状況]

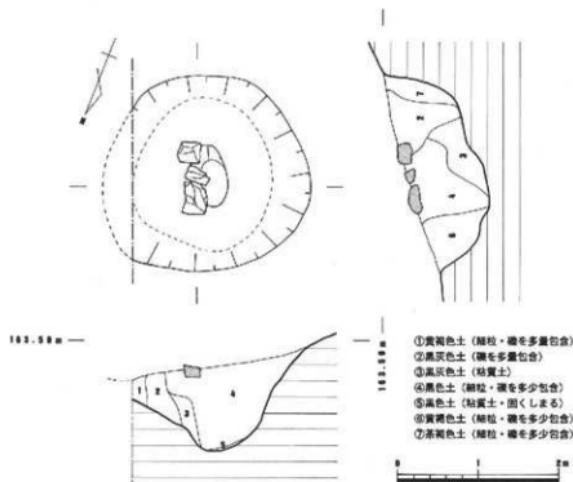
この遺構はT1東側にある南西斜面のSK-01東隣で検出された。埋土を除去した結果、10~25cm大の礫が堆積しているのが確認できた。礫を取り除き下面を査定した結果、遺構が検出されなかつたことから、SX-04南側の調査区外からこれらの礫を移動させたものと考えられる。



第13図 A区 SX-02 実測図



第14図 A区SX-03実測図



第15図 A区SX-04実測図

7) SX-03(第14図、図版10)

[検出状況]

西端平坦面のSI-01東隣で検出された。SX-02は、SI-01の上層と違い黒色土の層に砂礫を含む。SB-01の壁溝を削り込んでいることからも、本遺構はSI-01、SB-01とは時期を同じくするものではない。本遺構から遺物は検出されなかった。

[平面・断面形]

規模は長径3.7m、短径2.5m、検出面から上坑の深さは1.6mである。

8) SX-04(第15図、図版11)

[検出状況]

西端平坦面のSX-02北側で検出された。検出面から深さ40cmの間で、30~40cm大の礫3個が検出されたが、SX-02同様遺物は検出されなかった。

[平面・断面形]

規模は径2.4mの円形で、検出面から土坑の深さは1.6mである。

(原 拓矢)

## 3. B区の調査

B区の調査面積は約750m<sup>2</sup>である。現況は東西に平坦面をもつ段状の田畠である。田畠の耕作土と造成土を除去し精査を行った。精査の結果、地山面に堅穴住居址、溝状遺構、土壤基、ピットを確認することができた。

## 1) S I - 0 1 (第16図、図版12~14)

## [検出状況]

この住居址は、調査区東側の緩斜面で検出された。床面は畑地造成の際に掘削され検出できなかつたが、南東の壁は確認できた。

この住居址の埋土の層序は第16図のとおりである。

第3層(床面直上面)からは8世紀の須恵器が出土している。この土器より奈良時代の住居址と思われる。

## [平面・断面形]

平面形は一辺約3mの方形をなすと思われる。住居址の断面形は、壁がやや開き状をなしている。

南東の壁の中央部に、煙道(5世紀以降)の掘り込みを確認した。煙道部分は、トンネルを作りその後縦穴を掘削したと思われる。また、煙突として使われていた石垣の落ち込みを煙道部上方で確認した。

## [柱穴]

この住居址内には主柱穴と思われる穴はない。住居址の南東上方において、直線上に2つのピットが並んでいる。(東から深さ30cm、径20cmのはば円形状、深さ20cm、径20cmのはば円形状、ピット間の距離は約70cmである。)

## [出土遺物]

## 須恵器(第37図27~29、図版30)

27・28は輪状のつまみをもつ杯蓋の蓋である。27は口径17.2cm、器高4.1cm、28は口径13cm、器高2.4cmを測る。共に屈曲する口縁と内湾気味に下垂する端部を有している。調整は、口縁部外面に回転ヨコナデ、内面に回転ケズリ後のタテナデが施されている。胎土は3mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

29は杯身である。口径13.0cm、器高4.3cmを測る。口縁部内面に平坦面をもち、わずかな段を有している。内外面とも回転ナデ調整で、外面底部は回転糸切り後にナデ調整、内面に強い指ナデが施されている。

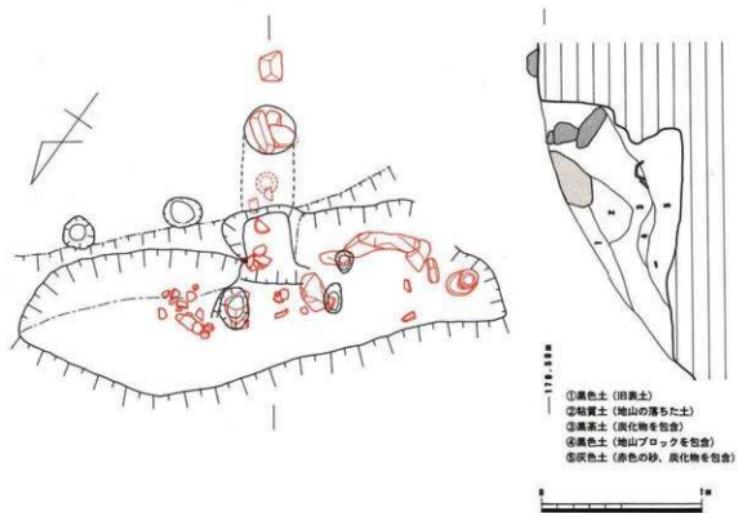
## 土師器(第37図30・31、図版30)

30は占式土師器の甕である。口径24.0cmを測る。大きく外反する口縁部を有し、端部を丸くおさめている。調整は、内外面とも摩滅が激しく不明である。31は製塙土器である。破損状況が激しく口径及び器高は不明である。

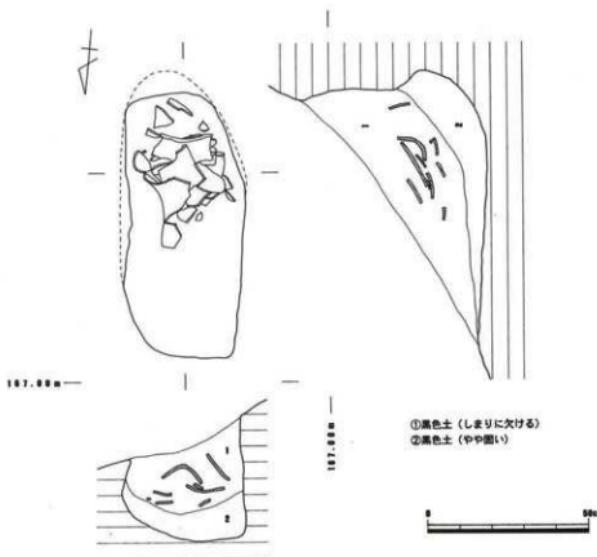
## 2) S I - 0 2 (第17図、図版15)

## [検出状況]

この住居址は、調査区西側の緩斜面で検出された。しかし、調査区下部平坦面造成時の掘削により、床面及び壁は破壊されており、煙道部分のみ確認した。トンネルを掘りその後縦穴を掘削した



第16図 B区 S I - 0 1 実測図



第17図 B区 S I - 0 2 実測図

と思われる。全体として、遺存状態は不良である。

住居址の埋土の層序は第17図のとおりである。

第1層(遺物包含層)内から8世紀の土師器(製塙土器)が出土した。

#### [出土遺物]

土師質土器<製塙土器>(第38図32、図版30)

32は8世紀のものと思われる製塙土器である。口径27.0cmを測る。ゆるやかに外反する口縁部を有し、端部を平坦におさめている。胴部には張りがない。調整は、外面口縁部から頸部にかけてヨコナデ、端部はナテ消し、内面胴部から底部にかけて同心円状のタタキメが施されている。

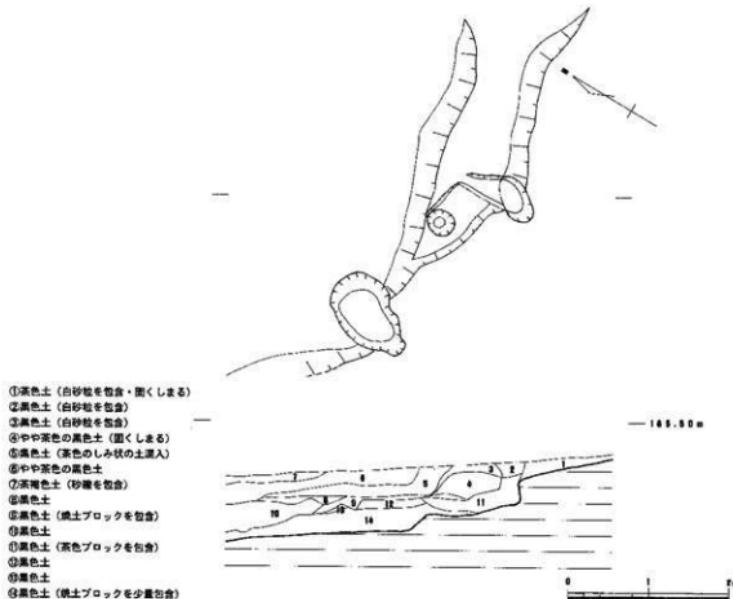
3) S I - 0 3 (第18図、図版16・17)

#### [検出状況]

この住居址は、調査区西側の下部平坦面で検出された。床面の状況は、南東から北西部分が不明瞭である。しかも、壁は東及び南側で高さ50cm程度が残っているだけで、全体として遺存状態は不良である。

住居址の埋土の層序は第18図のとおりである。

第9層(床面)から、焼土面を検出した。性格は不明だが、地床炉と思われる。



第18図 B区S I - 0 3 実測図

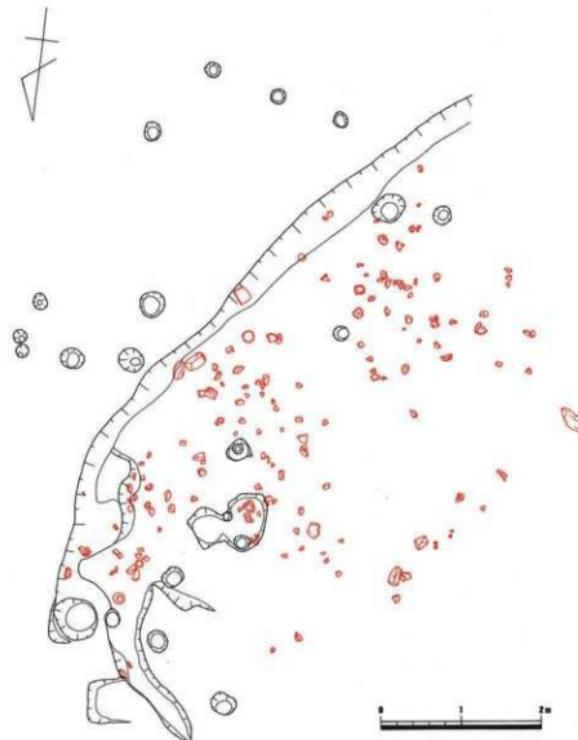
## [平面・断面形]

平面形、断面形とも不明瞭である。北側の壁に煙道の掘り込みを確認した。煙道部分は、トンネルを作りその後豊穴を掘削したと思われる。

## 4) S I - 0 4 (第19図、図版17・18)

## [検出状況]

この住居址は、調査区東側の下部平坦面で検出されたが、畠地造成の際の掘削により、壁等確認できなかった。住居址の層序としては、全面にわたり黒色土が堆積している。床面近くの埋土下層には黒褐色と茶色のブロックを含む層を確認した。これは、造成時の擾乱である。



第19図 B区S I - 0 4 実測図

## [出土遺物]

## 須恵器&lt;蓋&gt;(第39図33~44、図版31・32)

33~43は貼り付けの輪状つまみをもつ蓋杯の蓋である。口径は13.0~14.9cm、器高は2.1~3.5cmを測る。33は口縁部をやや内傾にし、口縁端部は外反している。35は輪状つまみの側面を膨らまし、やや梢円形気味である。38は口縁部から肩部にかけて屈曲し段を有している。口縁端部は、鳥嘴状に下垂する。39は天井部が低く、口縁端部は鳥嘴状に下垂する。41・42は口縁部は屈曲し、口縁端部は鳥嘴状に下垂する。43は天井部はやや高く、口縁部は屈曲し、口縁端部は鳥嘴状に下垂する。44はケズリだしの輪状つまみをもつ蓋杯の蓋である。口径は13.6cm、器高は2.8cmを測る。肩部は大きく屈曲している。口縁端部は顕著でない。調整はいずれも内外面とも回転ナデが施されている。

## 須恵器&lt;杯&gt;(第39図45~55・第40図56・57、図版32)

45~57は杯身である。口径は12.9~14.0cm、底径は7.5~10.0cm、器高は3.6~4.1cmを測る。45は平底をもつ。口縁部を外傾にし、端部を丸くおさめている。調整は、内外面とも回転ナデが施されており、底部外面にヘラおこしの痕跡がみられる。46は口縁部を外傾、平底である。底部外面にヘラおこしの痕跡がみられる。47は口縁部を外傾にし、端部を丸くおさめている。底部内面にヘラおこしの痕跡がみられる。48は口縁部はやや内湾気味に外傾している。底部外面にヘラおこしの痕跡がみられる。50は口縁部は、やや直立気味に外傾している。口縁端部は尖り気味である。調整は、内面は回転ナデ後の見込み部分にナデが施されている。外面部に回転糸切りの痕跡がみられる。51は口縁部から端部にかけてやや外反気味に外傾している。調整は、内面見込み中央にナデによる凹みがある。外面底部にヘラおこしの痕跡がみられる。52は口縁部から端部にかけてやや外反気味に外傾し、端部を丸くおさめている。外面接地の貼り付け高台を行している。54は口縁部から端部にかけて外傾している。回転糸切り痕を残し、貼り付け高台を有している。調整は内外面とも回転ヘラけずり後ナデが施されている。55は口縁部から端部にかけて、やや外反気味に指ナデにより立ち上げる。外面接地の貼り付け高台を有している。調整は、内外面とも回転ヘラけずり後ナデが施されている。

## 須恵器&lt;皿&gt;(第40図58~60、図版32)

58~60は皿である。口径は15.5~18.0cm、器高は1.5~2.1cmを測る。いずれも短く外傾している。58は内外面とも回転ナデが施されている。59は内面に回転ナデ、底面に回転ケズリ後のナデが施されている。外面に四線状の凹みがある。60は内面に回転ナデ、外面底部に回転ナデ後のヘラおこしが施されている。

## 土師器&lt;壺&gt;(第40図61~65、図版33)

61~65は土師器である。61は推定口径で28.0cmを測る。口縁部から頸部にかけてゆるやかに外反し、端部を丸くおさめている。調整は、内面口縁部にナデ、頸部にケズリ、外面にヨコナデが施されている。62は推定口径で22.0cmを測る。口縁部から頸部にかけてゆるやかな「く」の字状に仕上げる。調整は、口縁部内面にヨコナデ、頸部にナナメヘラケズリ、外面にヨコナデが施されている。63は推定口径で20.0cmを測る。単純口縁で口縁部が短く端部を丸くおさめている。調整は、内外面ともナデが施されている。64は奈良時代の壺である。推定口径で26.0cmを測る。口縁部から頸部にかけてゆるやかに外反し、端部を丸くおさめている。頸部は「く」の字状にわずかに屈曲する。調

整は、内外面ともヨコナデが施されている。65は弥生土器の底部片である。推定底径で4.0cmを測る。ゆるやかに外傾しながら立ち上がる。底部内面に指圧痕を確認する。

#### 土師質土器(第40図66・67、図版33)

66は製塙土器である。推定口径で26.0cmを測る。口縁部から頸部にかけてゆるやかに外反し端部を平坦におさめている。調整は、内面にヨコナデ、外面に口縁部から頸部にかけてヨコナデ、胸部にかけてタテ方向のタキが施されている。67は口縁部から頸部にかけての土器片である。頸部内面にヨコナデ、頸部から胴部にかけてナデ、頸部外面に刺突痕、頸部から胴部にかけて1条の凹線、その下に平行タキが確認できる。

#### 須恵器〈壺〉(第40図68・69、図版33)

68・69とも内面に同心円状のタキ、外面に平行タキが施されている。

#### 5) S I - 0 5 (第20図、図版18)

##### 〔検出状況〕

この住居址は、調査区東側下部平坦面で検出された。床面の状況は、北西部分が不明瞭であり、壁も南西部分でわずかに残っているのみで、全体として遺存状況は不良である。

#### 6) S I - 0 6 (第20図、図版19・20)

##### 〔検出状況〕

この住居址は、調査区東側下部平坦面で検出された。造成時に平坦にしたと思われる床面と壁は東、南、西側で確認した。

この住居址の埋土の層序は第20図のとおりである。

第9層(床面)において、8世紀の須恵器を検出した。

##### 〔平面・断面形〕

平面形は一辺約3.5mの方形をなすと思われるが、県道の建設時に北側が破壊されている。南側の壁中央部に煙道の掘り込みを確認した。

断面形は壁がやや外反し逆台形状を呈している。側壁は残存部分でもっとも高いところで65cm、低いところで15cm、壁の傾斜は約80°である。

床面はほぼ平坦で、床面上に煙道部より搔きだしたと思われる炭が堆積していた。

##### 〔柱穴〕

住居址外側にいくつかのピットを検出したが、つながりは不規則で住居を復元することはできない。

##### 〔出土遺物〕

#### 須恵器〈壺〉(第41図70~76、図版33・34)

70はボタン状のつまみをもつ蓋杯の蓋である。口径は15.2cm、器高2.4cmを測る。口縁端部は下垂する。調整は、内外面とも回転ケズリ後のナデが施されている。71~73は貼り付けの輪状つまみをもつ蓋杯の蓋である。口径は18.2~18.9cmを測る。調整は、いずれも内外面とも回転ナデが施されている。

#### 須恵器〈杯〉(第41図74、図版34)

74は口径14.0cm、器高4.5cmを測る。底部の端に属する高台を有している。

須恵器<皿>(第41図75、図版34)

75は口径17.7cm、器高2.1cmを測る。内外面とも回転ナデが施されている。

須恵器<鉢>(第41図76、図版33)

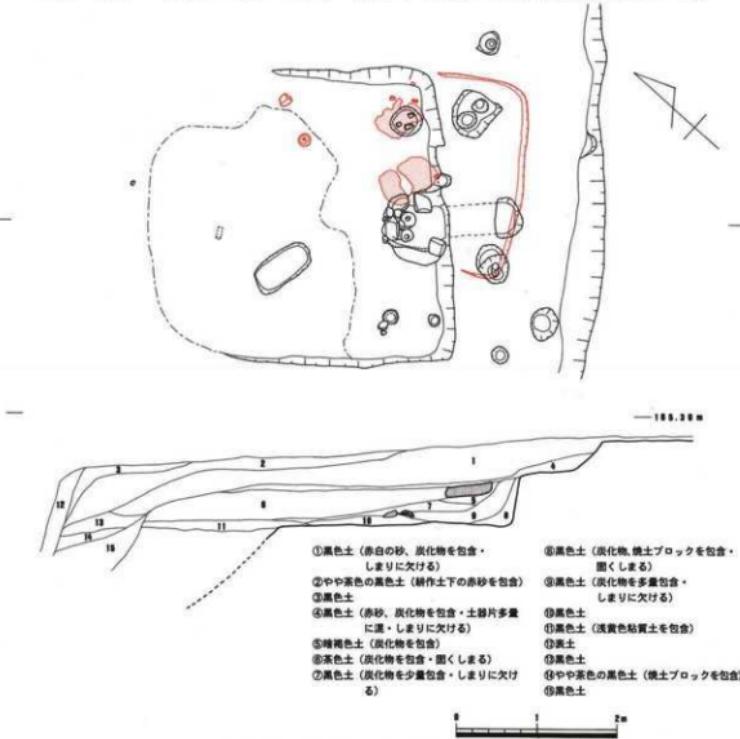
76は推定底径3.6cmを測る。平底である。底部中央の穴を確認した。調整は、内面に指頭圧痕、外面にヘラミガキが施されている。

須恵器<杯>(第41図77~80、図版34)

77・78は杯身である。口径は共に14.0cm、器高は3.95~4.1cmを測る。直線的に外傾し、口縁端部は丸くおさめている。79・80は貼り付け高台をもつ杯身である。口径は12.1~13.8cm、器高は3.9~4.14cmを測る。79は体部は僅かに内湾しながら立ち上がる。80は体部は直線的に立ち上がる。調整は、いずれも内外面共に回転ナデ、底部はヘラおこしが施されている。

須恵器<壺>(第41図81・82、図版34)

81・82は大甕の土器片である。調整は、81は内面に同心円状のタタキメ、外面に平行タタキメ、82は内面に回転ナデ、外面に頸部から体部に回転ナデ、体部に5条の沈線が施されている。



第20図 B区SI-05・BI-06実測図

## 7) SK-01～31(土壤墓)

土壤墓は、B区調査区全体にかけて31基検出された。時期は、古墳時代後期から江戸時代末期のものと推定される。調査区西側で検出したSK-01は検出面からみて中世のものと考えられる。

また、調査区東側で検出された30基は、埋葬方法により概ね6形態に区分できる。

- 1 木棺が10基。(うち2基で人骨出土)
- 2 墓標石を伴うものが4基。
- 3 桶棺が10基。
- 4 土壇中より須恵器が出土し、奈良時代と考えられるものが2基。
- 5 箱形石棺が1基。
- 6 その他の形態をもつものが3基。

以上のうち、1～5形態について述べる。

### (1)木棺墓(SK-02・03・05～07・09～13)

#### SK-02(第21図、図版23)

この遺構は、調査区東側の2段目平坦面から検出した組合せ式箱形木棺墓である。掘り方は主軸を北東～南西にとり、内法は、一辺1.3mの正方形を呈し、深さは55cmまで掘り込んでいる。木棺は、側板で小口板を挟む方法で組まれている。それぞれを組み合わせる際に、釘を使い固定している。材質は不明である。木棺内は、内法長70cm、内法幅45cmを測るもので、人骨を一体検出した。埋葬方法は、頭部を北東に置き、西を向いて横臥位で膝を屈曲させていた。ほかに数珠の玉数個と編まれた頭髪が出土した。時期は、江戸時代末期と推測する。

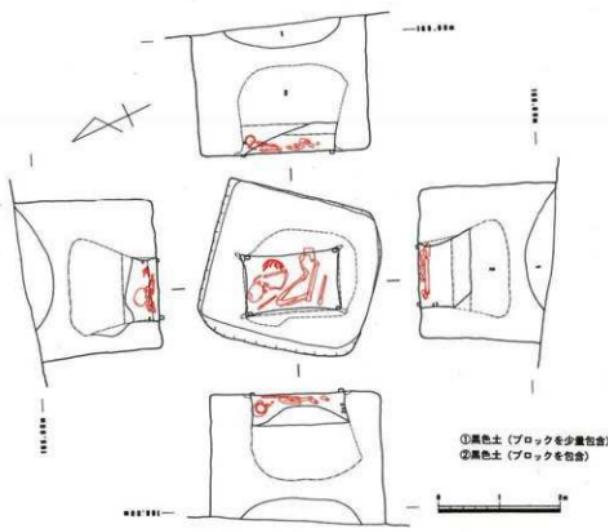
#### SK-03(第22図、図版24)

この遺構は、調査区東側の2段目平坦面から検出した組合せ式箱形木棺墓である。掘り方は主軸を南北にとり、内法長75cm、内法幅60cmの長方形を呈し、深さは60cmまで掘り込んでいる。流入上のために側板のみ確認できた。側板は3枚の板を一辺とし、その内真ん中の板を突出させた形で、釘を使い固定されている。材質は不明である。木棺の内法は、一辺45cmの正方形を測るもので、人骨を一体検出した。埋葬方法は、骨盤を木棺中央部付近に置き、西を向いて膝を曲げた状態の座位である。時期は、江戸時代末期と推定する。

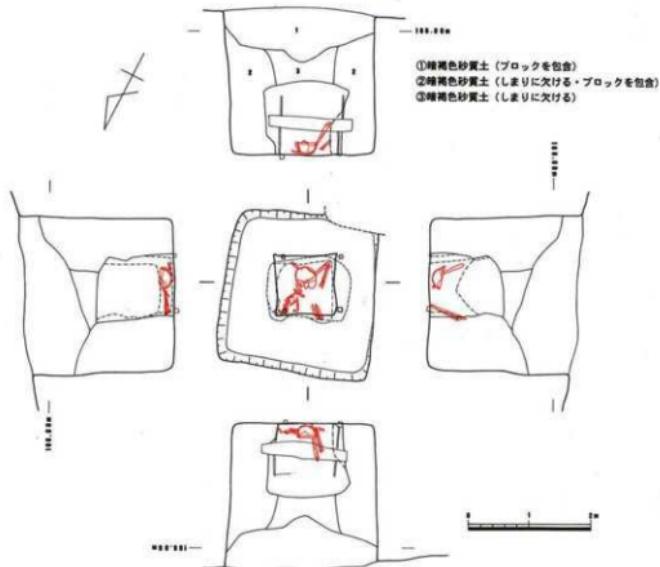
### (2)墓標石を伴うもの(SK-08・14～16)

#### SK-14(第25図)

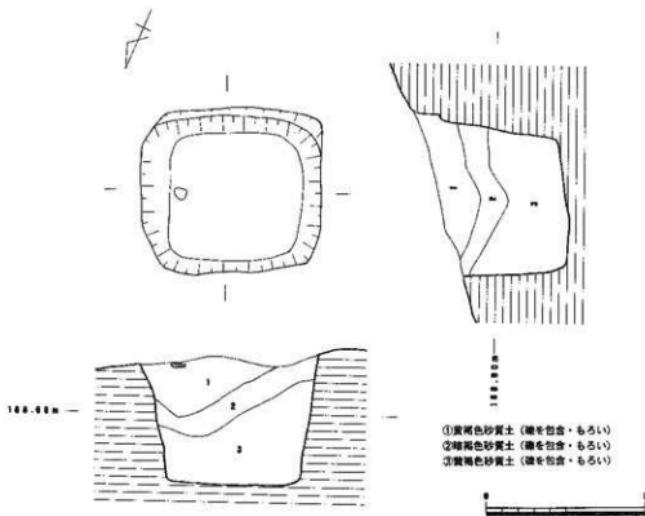
調査区南東部の緩斜面で検出された墓標石を伴う土壤である。長径1.5m、短径1.1mの方形を呈し、深さは65cmを測る。底面は水平であり、断面は逆台形状を呈する。上塙内には多量のブロックを含む黒黄色土、粘土質の黒褐色土が堆積している。遺物は出土していないが、検出面で石が2個、底面より20cm付近、ちょうど2層と3層の境目あたりで石が9個検出された。いずれも石材は安山岩系で、特別加工された様子はなかった。時期は、不明である。



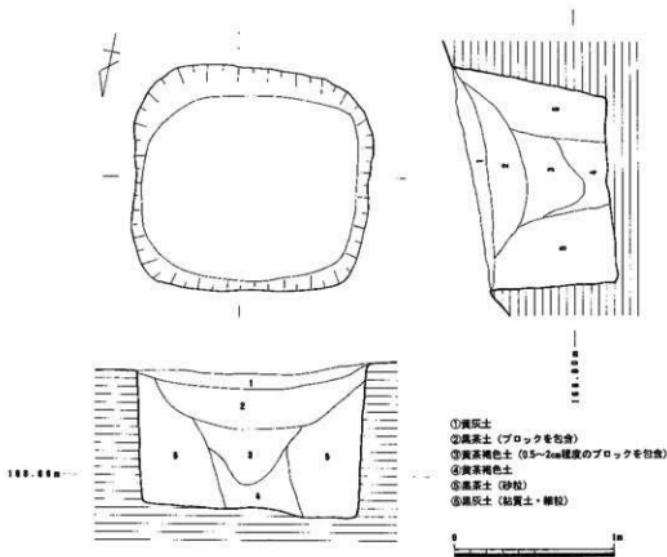
第21図 B区SK-02実測図



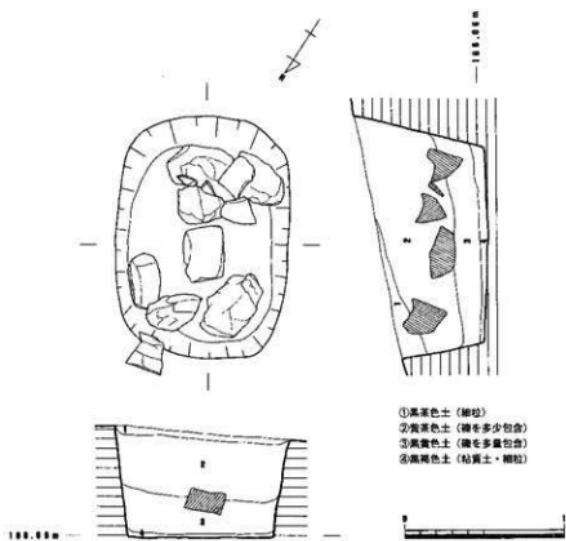
第22図 B区SK-03実測図



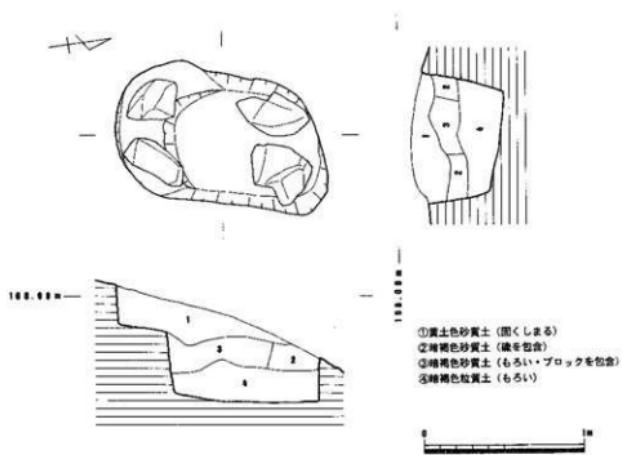
第23図 B区SK-05実測図



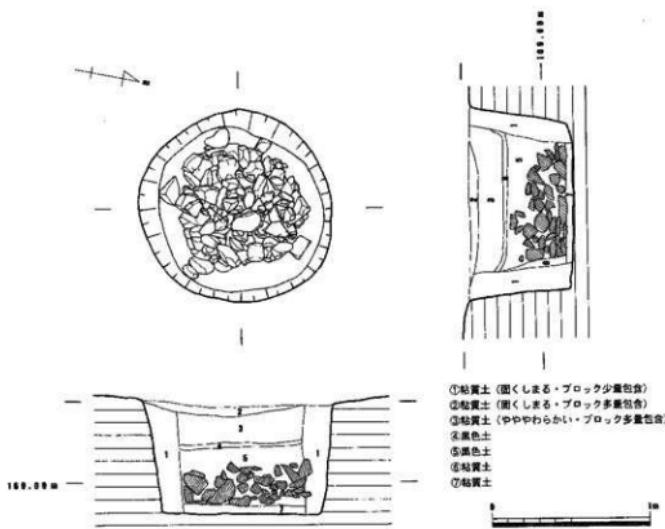
第24図 B区SK-12実測図



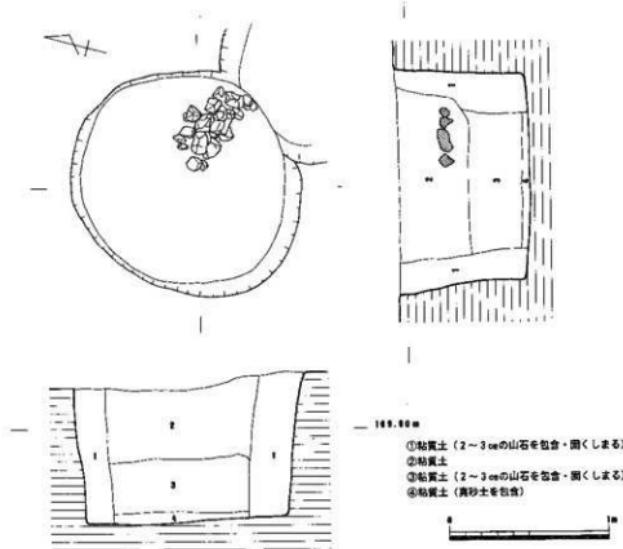
第25図 B区SK-14 実測図



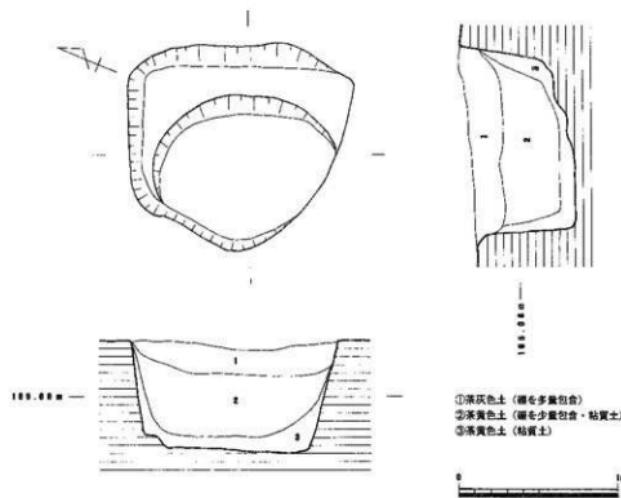
第26図 B区SK-16 実測図



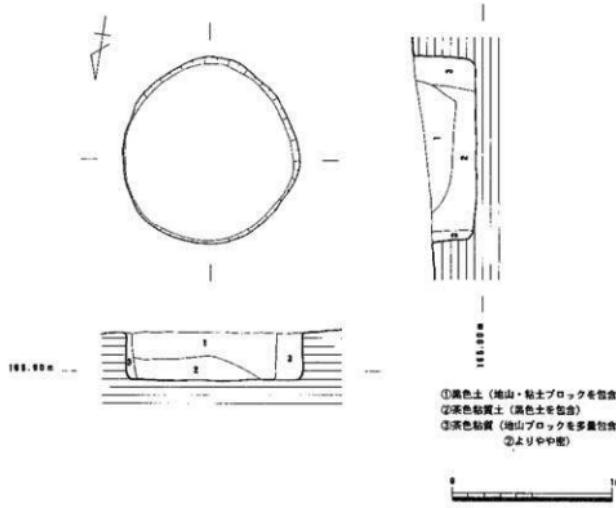
第27図 B区SK-18実測図



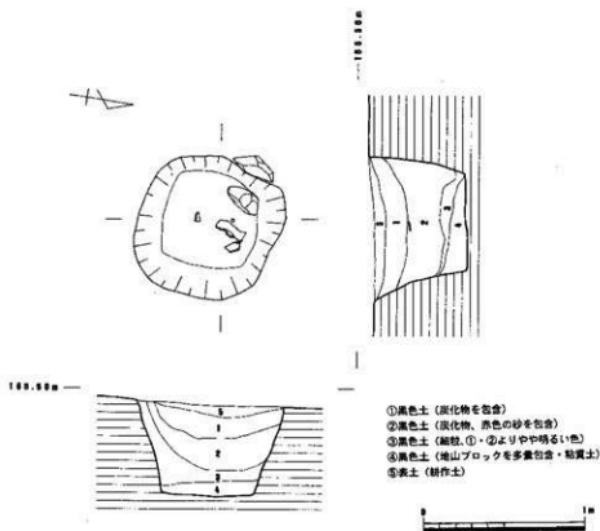
第28図 B区SK-19実測図



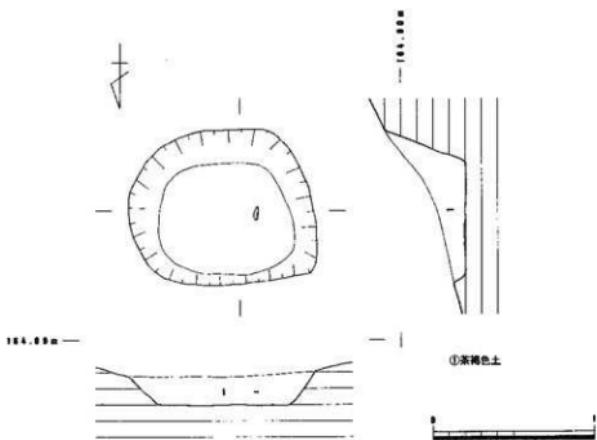
第29図 B区SK-25実測図



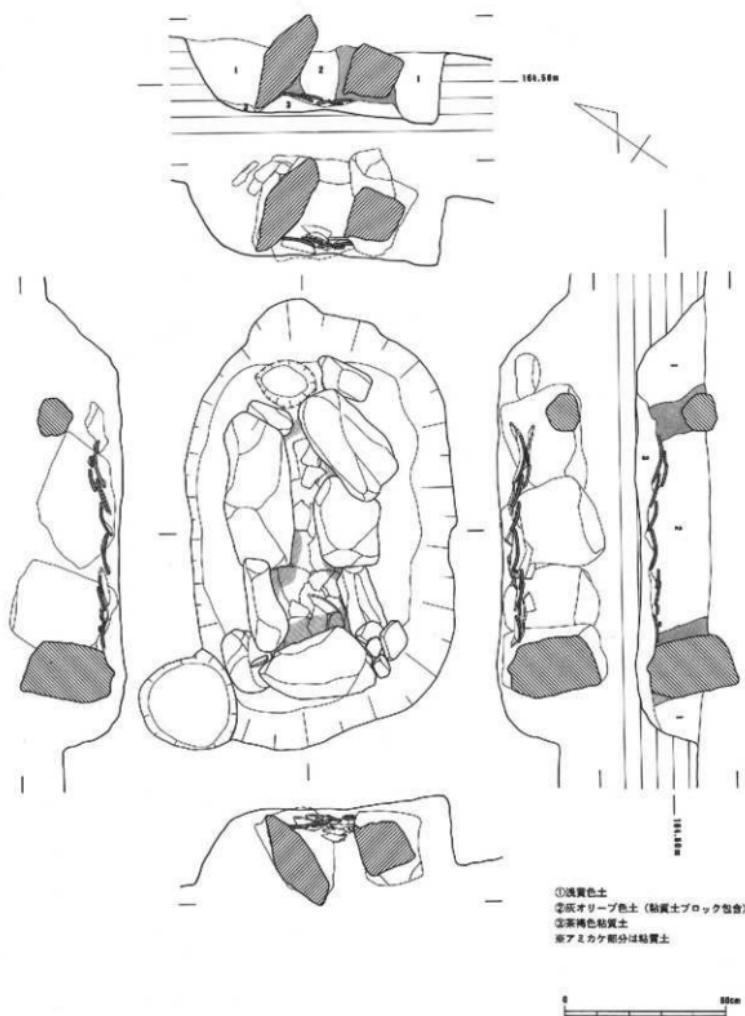
第30図 B区SK-26実測図



第31図 B区SK-28実測図



第32図 B区SK-30実測図



第33図 B区SK-31実測図

## (3) 桶棺(SK-17~26)

SK-18(第27図、図版21・22)

この遺構は、調査区南側上部平坦面で検出された棺を伴う土壙である。長径1.2m、短径1.1mの円形を呈し、深さ65cmを測る。底面は平坦である。土層観察から、土壙内に粘質土を充填してから棺を埋置していることが確認できた。また、粘質土から棺の輪跡も確認された。以上のことから、この粘質土は、木棺部材の押えに使用されたものと推測できる。また、底面より5cm付近で5~20cm程度の河原石を多量に検出した。時期は江戸時代のものと推測する。

## (4) 土壙中より須恵器が出土

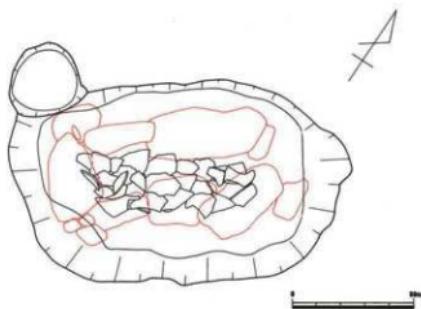
SK-30(第32図)

この遺構は、調査区東側下部平坦面で検出された一辺が1.1mの土壙墓である。しかし、烟造成の際に上部が破壊されている。底面は平坦である。土壙内は、黒色土が堆積しており、この黒色土内より須恵器が出土した。時期は須恵器から奈良時代のものと推測する。

## (5) 箱式石棺

SK-31(第33図、図版26・27)

この遺構は、調査区東側下部平坦面(耕作土除去後)で検出された箱式石棺である。掘り方は主軸を北東-南西にとり、内法は、長径1.05m、短径68cmの楕円形を呈す。耕作土除去後の平坦面より深さ20cmまで掘り込んでいるが、段は確認できなかった。石棺の規模は内法で、長径63cm、短径20cmの方形を呈し、深さは側石の上面から34cmを測る非常に小型のもので、幼児を埋葬したと思われる。側石



第34図 B区SK-31遺物出土状況

の石材は安山岩系で、南側で4個、北側で3個、小口を支えるような形で配置され、粘質土で固定されている。南側の側石は土圧によって内傾する箇所が見られたが、側石の設置された地山面の加工状況からすると、本来的にはほぼ垂直に立ち上がり、断面形は方形であったと推定される。棺床には、須恵器の甕の破片が敷き詰められていた。この須恵器は、あらかじめ壊した後に床に敷き詰めたものと考える。口縁部及び底部は出土しなかった。時期は、須恵器から古墳時代後期と推測する。

(大橋 覚)

【参考文献】

- ・島根県教育委員会「森遺跡」「森遺跡 板屋1遺跡 森脇山城跡 阿丹谷辻堂跡 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2」 平成6年
- ・島根県教育委員会「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書3 門遺跡」 平成8年
- ・島根県教育委員会「董富遺跡」「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書IV」 1992年
- ・鹿島町教育委員会「諏訪地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南諏訪草田遺跡」 1992年
- ・川本町教育委員会「キタバタケ遺跡発掘調査報告書」 1992年
- ・瑞穂町教育委員会「野田西遺跡」「大金谷遺跡」「いにしえの瑞穂 水明カントリークラブ内埋蔵文化財発掘調査概報」 1995年
- ・瑞穂町教育委員会「川ノ免遺跡発掘調査報告書」 1996年
- ・島根県古代文化センター「暮らしを探る」「いにしえの島根ガイドブック」第4巻 1996年
- ・宮本長二郎「弥生時代・古墳時代の据立柱建物」「弥生時代の据立柱建物－本編－」埋蔵文化財研究会 1991年
- ・岩崎直也「弥生時代の建物」「弥生時代の据立柱建物－本編－」埋蔵文化財研究会 1991年

## 第4章 まとめ

清源那遺跡は、県道の改良工事に先立ち石見町教育委員会が実施した遺跡の分布・試掘調査により確認された遺跡である。立地としても中山古墳(墳墓)群と隣接しており、古墳(墳墓)造成に係わる住居址が存在する可能性のある地域と考えられた。調査の結果、竪穴住居址9棟、掘立柱建物跡1棟、石棺墓1基、土塙墓31基を検出した。

### 1. 住居址・出土遺物について

A区より検出したSI-01は、楕円形をなす竪穴住居址で、ピット及び壁溝の検出から数回の建て替えが行われていたと考えられる。住居址の床面直上より出土した高杯は、鹿島町南講武草田遺跡における編年6期に存在すると思われる。また、それと共に共伴関係して概ね草田6期に時期位置が与えられる複合口縁の土器片も同住居址の床面直上より出土している。

B区で検出されている遺構のうち8世紀の遺構は、煙道を伴う住居址が4棟、中央に炉と思われる施設をもつ住居址が1棟、その他、建物の山側に溝を伴う住居址が3棟検出された。煙道を伴う4棟のうち、形状の確認ができるものは調査区東側の下層面で検出したSI-06のみである。形状は方形を呈し、山側斜面をコの字状に掘り込み、南側の壁中央部に煙道を有している。このように煙道を伴う形状は、隣接の瑞穂町川ノ免遺跡から検出された住居址と類似している。他の3棟は煙の造成により掘削されており、煙道とその周辺のみの検出である。中央に炉をもつと思われるSI-05は、SI-06の上面に於いて検出した遺構で、土層觀察よりSI-06を埋め立ててその上面に作られていることが確認できた。床面において、この住居に伴うピットは確認できなかった。

B区住居址からは土師質の土器と須恵器が出土している。須恵器は輪状のつまみをもつ蓋杯が多数出土した。蓋は、10~12cm前後の径と18cm前後の径の2つに体系される。出土状況から人径の須恵器が古いと考えられるが、用途の違いによる可能性もあり類似の調査例を検討する必要がある。杯は、高台付杯と高台のないものとに分けられる。煙道部周辺に須恵器が重なって出土したSI-01及びSI-06は、祭祀遺構の可能性も考えられる。また、SI-02の煙道中より出土した製塙土器は、九州で出土している同時期のものと類似している。これは、九州地方からの招来品の可能性もあるが、類例がなく在地土器とも考えられる。用途等は今後の検討課題である。

住居址に伴って出土した須恵器のうち底面に糸切りを施してある上器を詳しく検討すると、A区では、SI-01の覆土中より出土している。また、B区ではSI-01及びSI-04からごく少量出土しているだけで、ほとんどがヘラおこである。以上のことから、B区の遺構は、周辺遺跡の出土土器と比較して瑞穂町ロクロ谷遺跡及び旭町重富遺跡出土の須恵器と類似しており、8世紀から9世紀後半の住居址と考えられる。A区の住居址の存在年代は、8世紀から10世紀と考えられる。

その他の出土遺物としては、弥生土器、石鎌、石斧、土鍬、鐵斧、陶磁器がある。弥生土器は、検出面上の黒色土から出土した遺物で、これを流れ込みと想定すると、隣接にこれらの土器を伴う遺構が存在している可能性も考えられる。石鎌の材は、サヌカイトと思われる。これは住居址の埋土中より出土した遺物で、産地は不明である。土鍬は、B区住居址埋土中において出土した遺物で

ある。石斧は、B区S I-06の床面下層において検出した遺物である。鉄斧は、S I-06の北斜面において出土した袋状鉄斧で8世紀の遺物と考えられる。陶磁器は調査区全般から出土しており、時期は14~19C前半の遺物と考えられる。

## 2. 土壙墓について

土壙墓は、A区で1基、B区で31基の計32基を検出した。そのうち、B区から検出した土壙墓は、埋葬の形態から7形態に区分できる。

B区2段目平坦面の最東端において検出したSK-01は、B区の層位状態から中世のものと考えられる。

B区2段目平坦面の中央部より検出したSK-02・03・05~07・10~12は、方形に掘り込まれており、検山状況及び土層観察から木棺墓と考えられる。そのうち、SK-02・03からはそれぞれ人骨及び棺を接合していた鉄釘が出土している。SK-02は、頭部を北東に置き、西向きの横臥位で膝を屈曲させ埋葬していた。保存状態は良好で頭髪が残存していた。SK-03は、座棺で西向きの状態で埋葬していた。なお、この人骨2体を鳥取大学医学部解剖学第二講座教授井上貴央氏に鑑定していただいた結果、いずれも江戸時代末期のものと判明した。詳細については付論で述べられている。

B区2段目平坦面の西側より検出したSK-08・14~16は、長方形様の土壙墓である。土壙中に河原石が充填されていたが、その石は墓標石として置かれていたものが沈下したものと考えられる。

SK-17~26は、検出状況及び土層観察から桶棺と考えられる。

B区1段目平坦面より検出したSK-18~22は、規則正しく並び同系の一族の墓と考えられる。遺物は出土していないが、層位状態から時期は近世と考えられる。

B区3段目平坦面(SK-03~06検出面)の西側から検出されたSK-23~27は、土壙中より陶磁器片が出土しており、この遺物から時期は17~19C前半のものと考えられる。

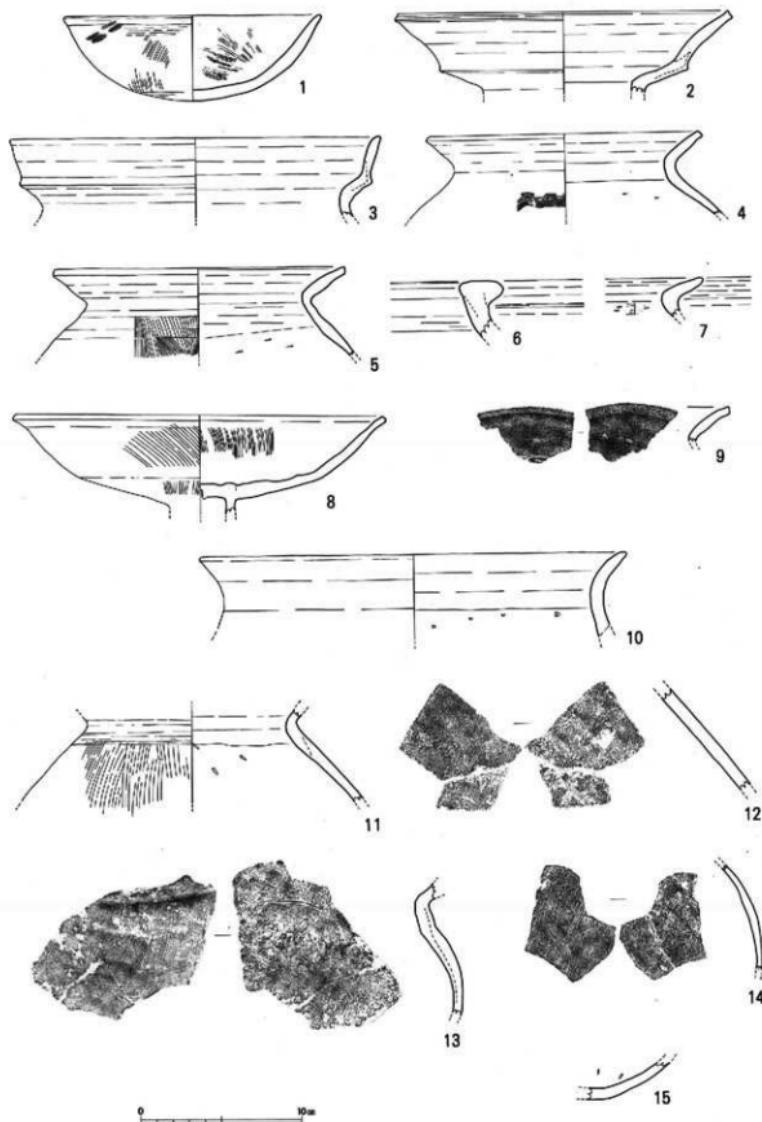
B区3段目平坦面の東側から検出したSK-28からは須恵器片が出土している。須恵器片から8世紀の土壙墓と考えられる。

B区3段目平坦面の最西端で検出したSK-31は、箱式石棺の主体部をもち、規模から小児棺と考えられる。棺床に口縁部と器底部を除いた須恵器片が敷き詰められていた。須恵器の形状から古墳時代の埋葬施設と考えられる。検出面が畠の耕作土の直下にあり、埴丘・無埴丘の確認はできなかった。今後、類似の埋葬方法の文献研究・資料収集及び、中山古墳(墳墓)群とその周辺にある古墳群との関連性を踏まえて、このような特異な形態をもつ埋葬方法の全容を明らかにしていきたい。

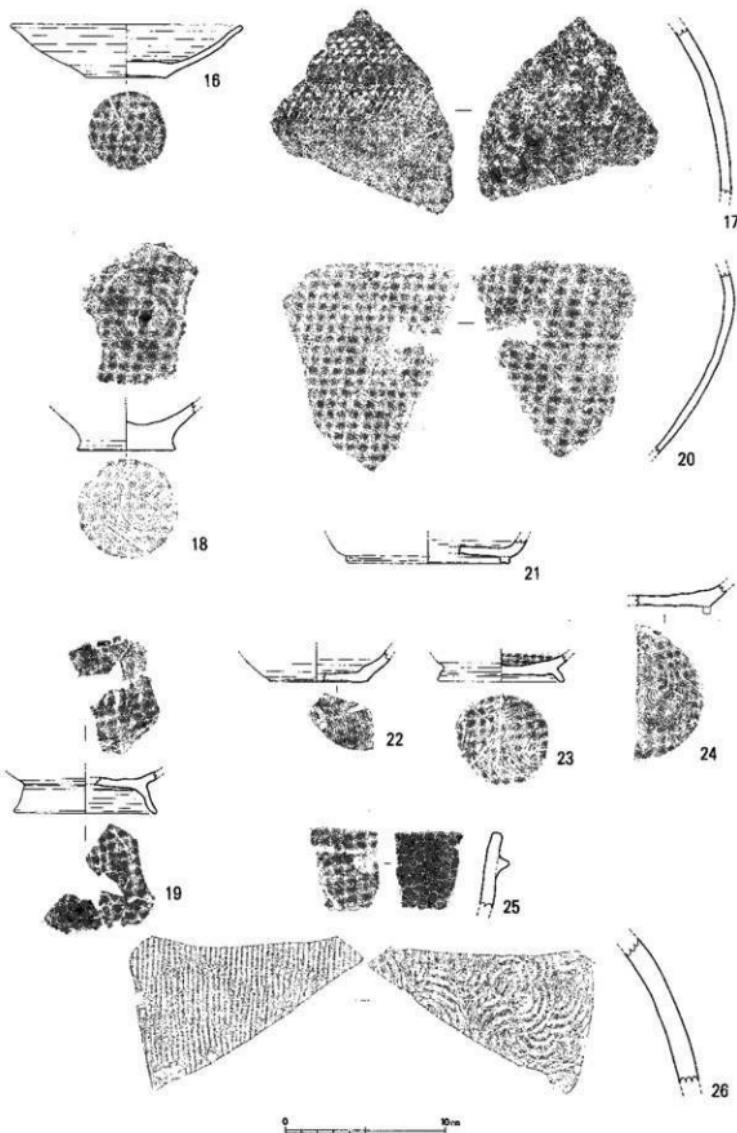
## 3. おわりに

今回の調査は、県道の道路改良に伴う緊急調査として実施したものであった。計画当初には、遺跡台帳にも記載されていない地域で、周辺遺跡の状況から遺構が存在すると考えられた。調査の結果、予想以上に遺構及び遺物が確認できた。これまでの於保地盆地内における調査の中で、このような集落跡の調査例は少なく、特に中山古墳(墳墓)群周辺での集落跡は確認できていない。今回の調査により確認された遺構及び遺物は、これからの中山古墳(墳墓)群を含めたこの周辺の遺跡を調査する上で貴重な資料となり得るであろう。

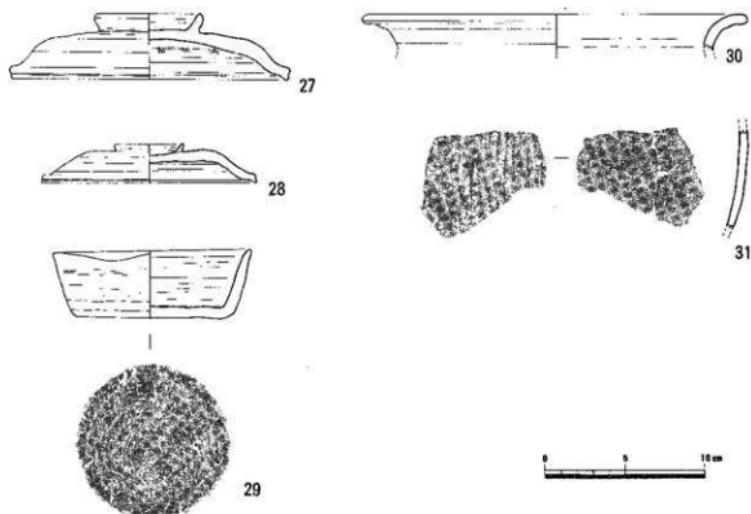
(寺脇隆彦、大橋 覚、原 拓矢)



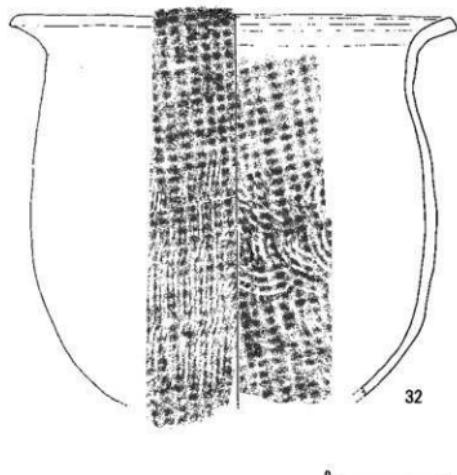
第35図 A区S I - 01出土遺物実測図



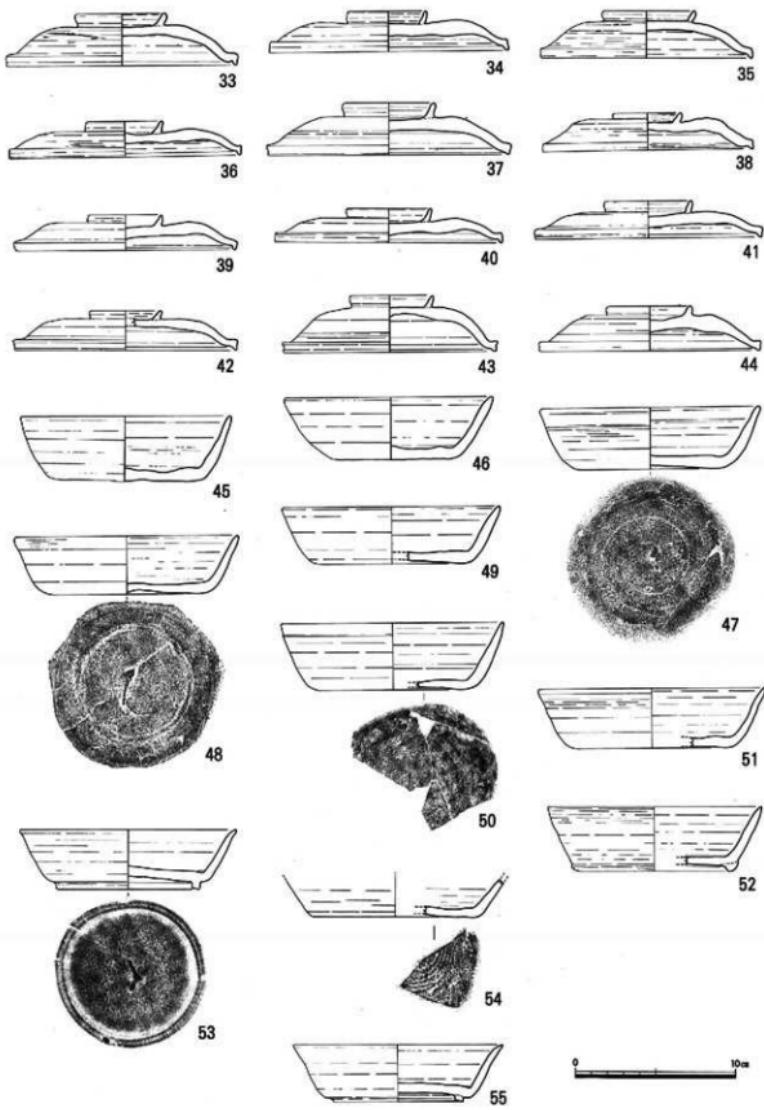
第36図 A区S I - 01出土遺物実測図



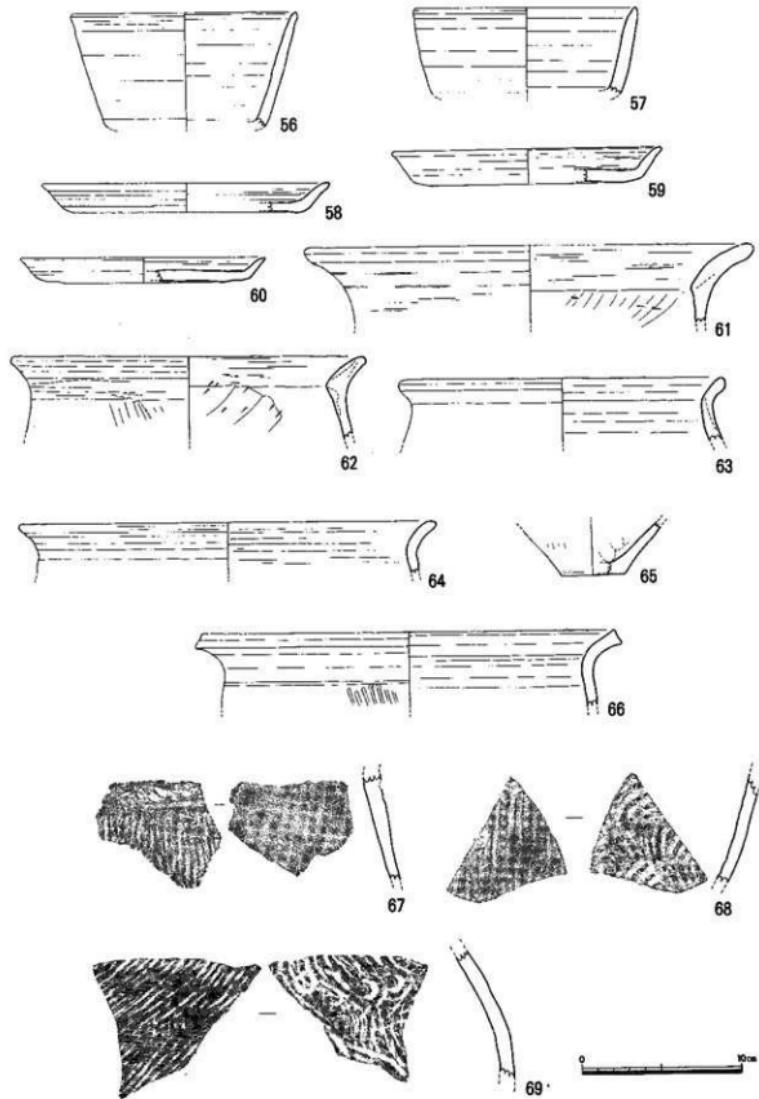
第37図 B区S I - 0 1出土遺物実測図



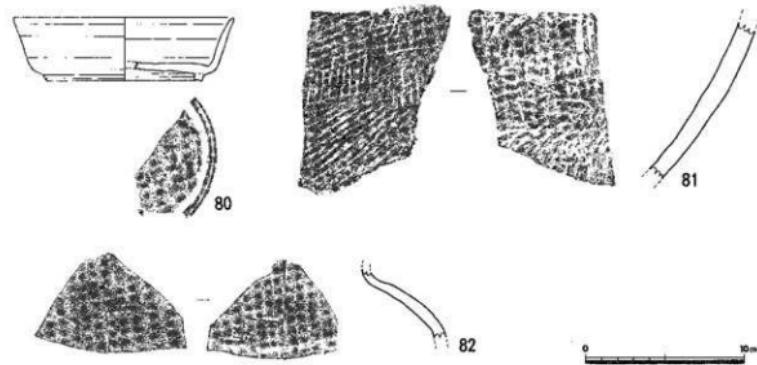
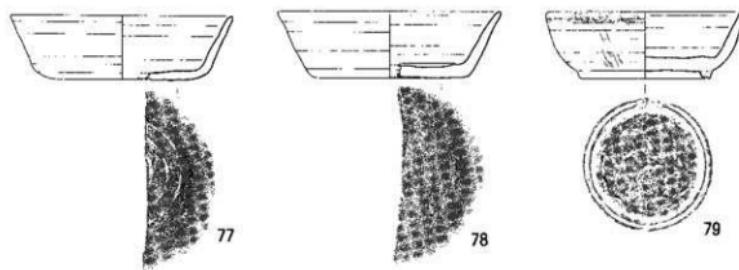
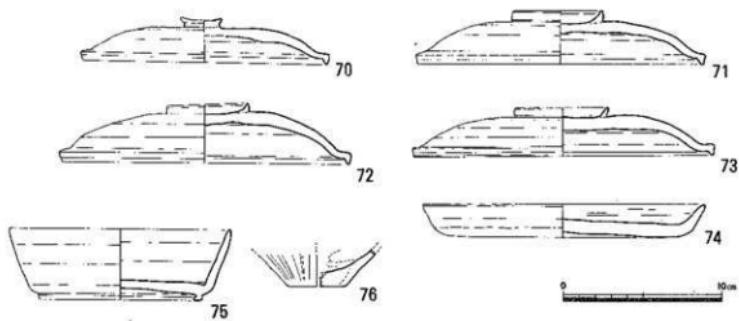
第38図 B区S I - 0 2出土遺物実測図



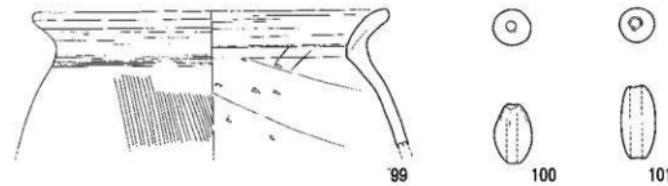
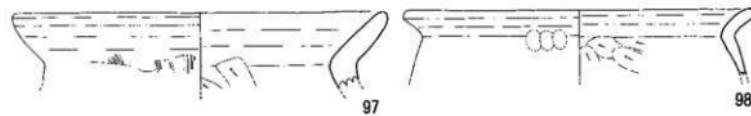
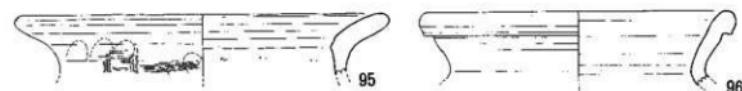
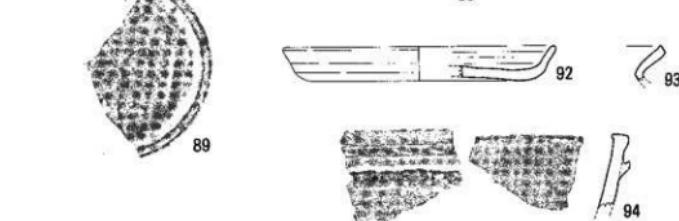
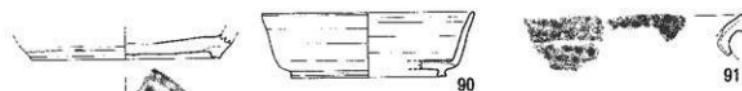
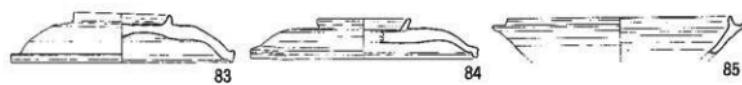
第39図 B区S I - 04出土遺物実測図



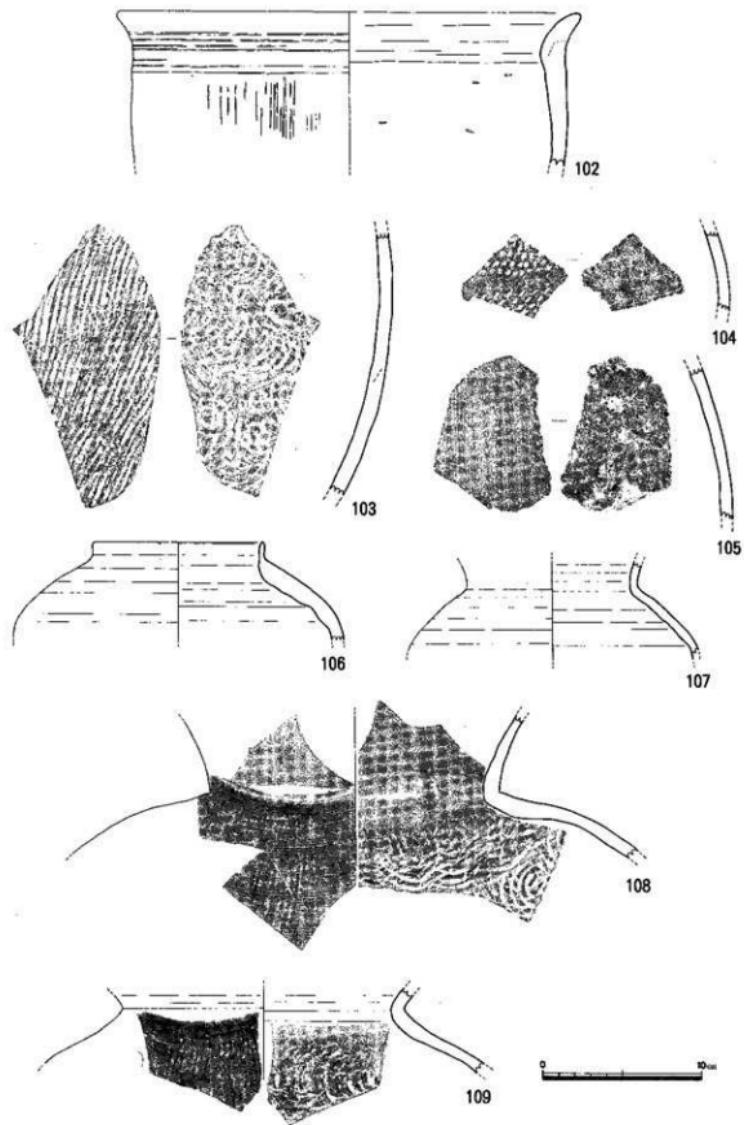
第40図 B区S1-04出土遺物実測図



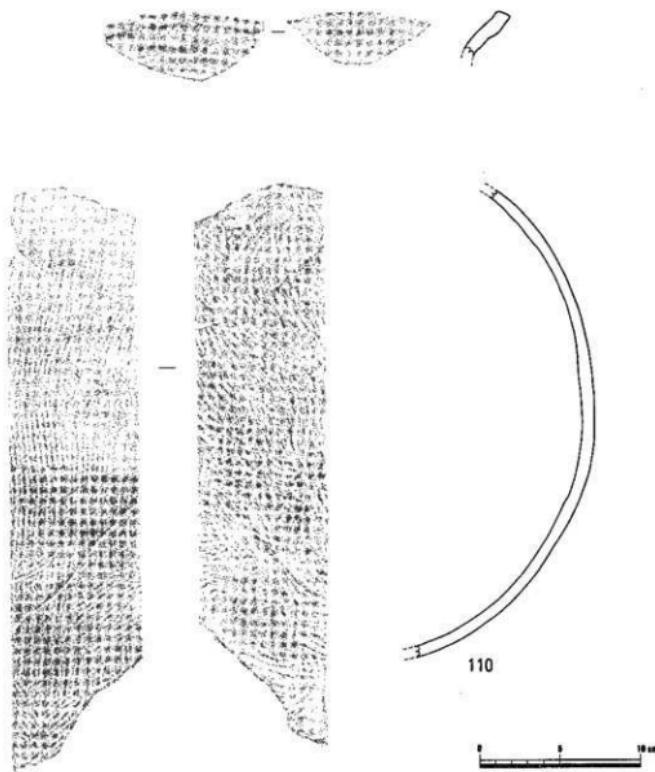
第41図 B区S I - 0 6出土遺物・住居に伴わない遺物実測図



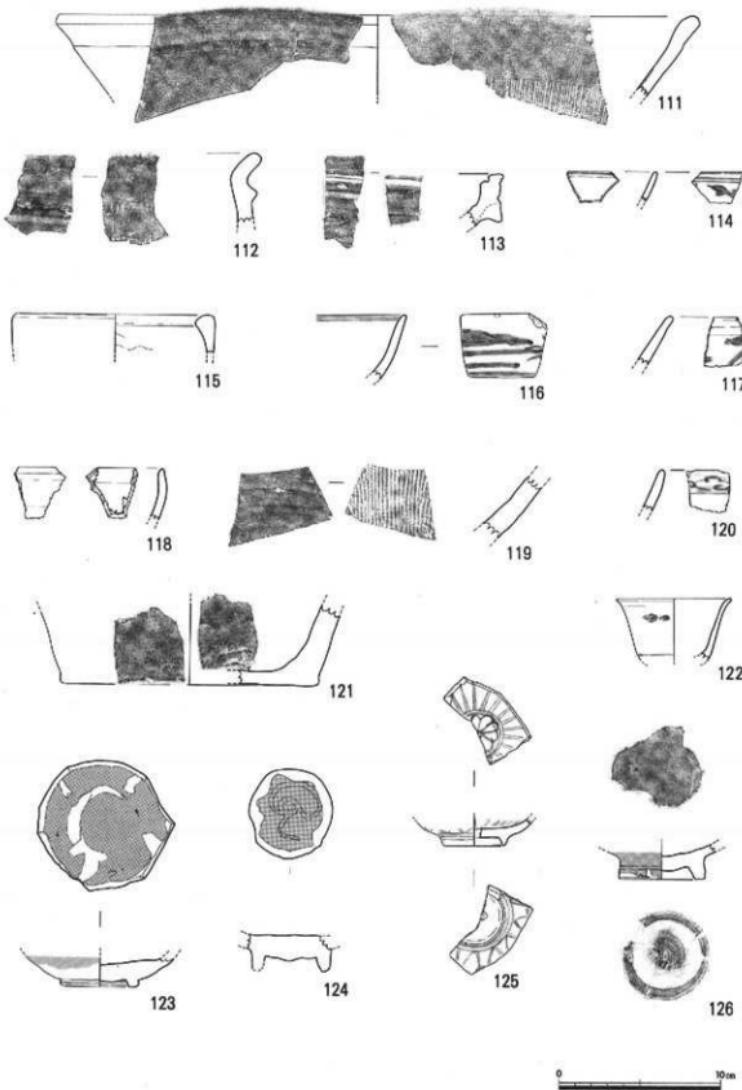
第42図 表探遺物実測図



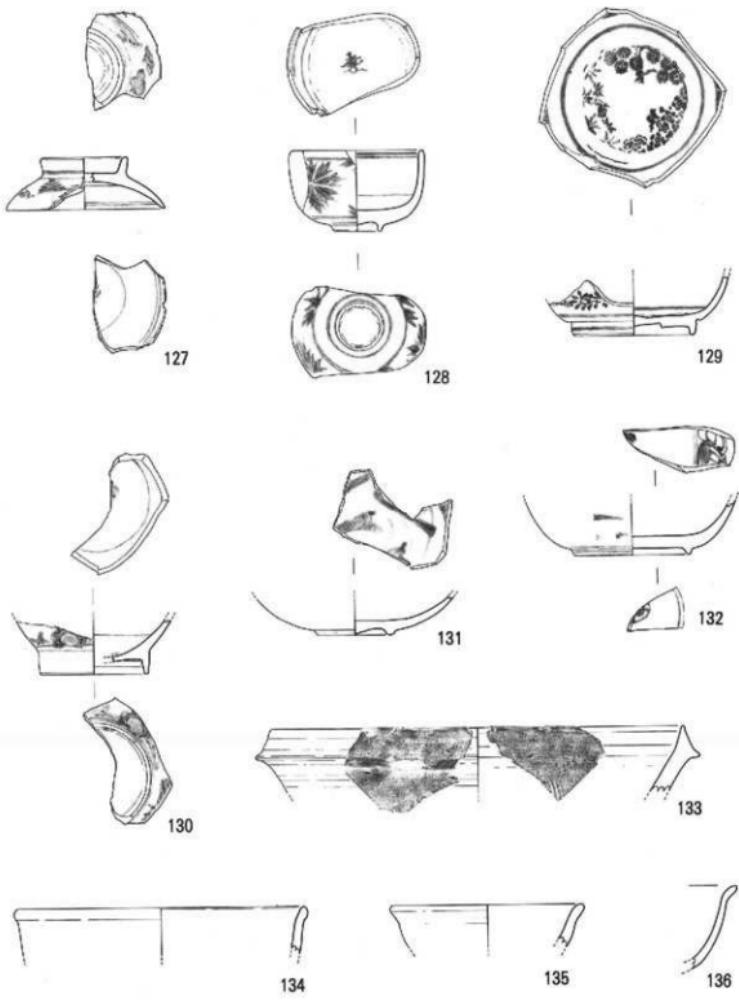
第43図 表採遺物実測図



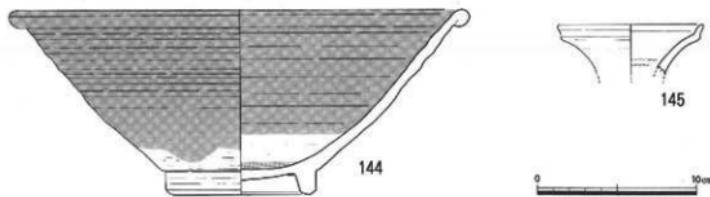
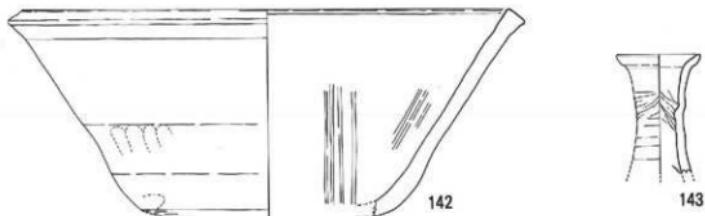
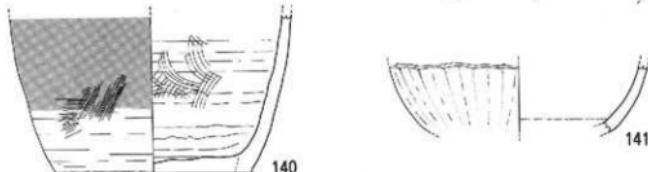
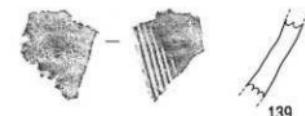
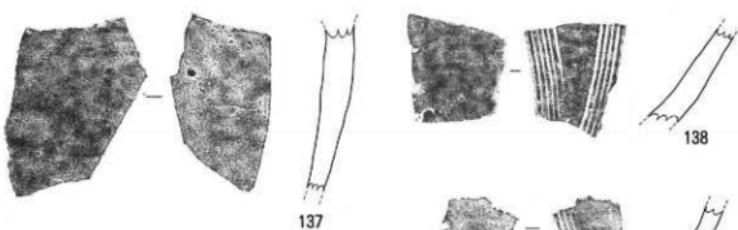
第44図 B区SK-31出土遺物実測図



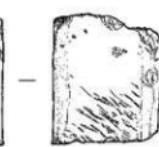
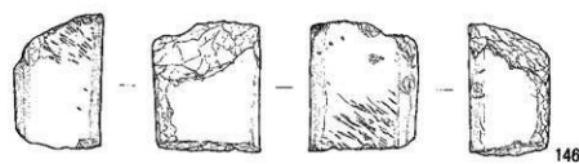
第45図 出土陶磁器実測図



第46図 出土陶磁器実測図



第47図 出土陶器実測図

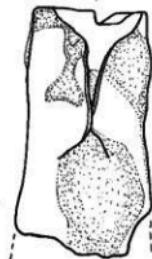


146

147

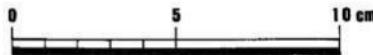
148

149



151

150



第48図 石器・鉄製品実測図

## A区出土遺物

拂園 國版 番号	出土地点	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎上・焼成	備考
35-28-1	SI-01覆土中	塊	口径 15.8 器高 5.3	口縁部や外反し、端部は丸い。	淡黄緑	胎上:3mm以下の砂礫と石英含む 焼成:良好	
35-28-2	SI-01床面	壺	口径 20.5	複合口縁。端部に1条の沈線。 口縁部強く外反。	にぶい赤緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	複合部径15.4cm
35-28-3		甕	口径 23.0	複合口縁。複合部がやや突出している。 口縁部や外反。内外面にコナデ。	外／にぶい緑 内／にぶい緑	胎土:1~2mmの砂粒多く含む 焼成:良好	LI縁部小片
35-28-4		甕		縁部がゆるい「く」の字状に屈曲。端部は平坦。	にぶい緑	胎土:1.5mm以下の砂粒含む 焼成:良好	難仔 13.8cm 口縁にスス付着
35-28-5		甕	口径 18.0	縁部がくくの字状に屈曲。端部は平坦。	赤緑	胎土:約2mmの躍、灰石、 石英細粒含む 焼成:良好	
35-28-6	SI-01覆土中	瓦質土器要		端部を肥厚させ外側に折り曲げる。 端部上面は平坦。	赤緑	胎土:3mm以下の砂礫含む 焼成:良好	
35-28-7		甕		縁部がゆるい「く」の字状に屈曲。	淡黄緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
35-28-8	SI-01床面	尚坏	口径 23.2	口縁部外反し、端部は平坦。环底面に刺穴跡。环部の外側にハケメ。	外／黒褐 内／緑	胎土:2.5mm以下の砂礫含む 焼成:良好	内外面にスス付着
35-28-9		甕	口径 15.0	口縁部外反し、端部は平坦。 ナデによる段がある。	明褐灰	胎土:1.5mm以下の砂粒含む 焼成:良好	口縁部内面 にスス付着
35-28-10	SI-01覆土中	甕	口径 26.6	口縁部は外反し、端部に沈線を施す。	外／赤 内／暗赤灰	胎土:2~5mmの躍含む 焼成:良好	口縁部小片
35-28-11		甕		縁部内外面にナデ、内面削り落としにケズリ。	にぶい緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
35-28-12	SI-01床面	甕		外面にヘラによる羽状文を施す。	緑	胎土:1.5mm以下の砂粒、 石英含む 焼成:良好	
35-28-13		壺		縁部は「く」の字状に屈曲。 縁部の裏壁は薄く、縁部に向けた肥厚している。	外／灰白 内／にぶい緑	胎土:2.5mm以下の砂礫含む 焼成:良好	
35-29-14	SI-01覆土中	甕		薄い原壁。内面にヘラケズリ。	外／褐 内／赤緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	上闇部片 外側にスス付着
35-29-15	SI-01床面	底部		丸底様の底部に半周面を残す。	外／浅黄緑 内／赤緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
36-29-16	SI-01覆土中	壺	口径 14.4 底径 5.0 器高 3.3	体感から口縁部にかけてゆるやかに広がる。底面に斜切痕。	浅黄緑	胎土:0.2~0.5mmの砂粒含む 焼成:良好	内面にスス付着
36-29-17	SI-01床面	甕		肩部外側に連続刺突印。内面は板状工具によるケズリ。	にぶい緑	胎土:3mm以下の砂礫含む 焼成:不良	
36-29-18	SI-01覆土中	底部	底径 6.2	底部は平坦で回転糸切痕を施す。 内面は溝巻き状の凹凸ナデ。	灰白	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
36-29-19		坏	底径 8.8	「ハ」の字状に聞く高い高台をもつ。	灰白	胎土:微砂粒含む 焼成:不良	
36-29-20	SI-01床面	甕		肩部外側に細い8条以上の沈線を施す。	淡黄緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
36-29-21	SI-01覆土中	須恵器坏		連凹状の貼付高台をもつ。 全体に施釉。	青灰	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	高台径 10.0cm
36-29-22		須恵器坏	底径 9.0	底部に凸台痕を残す。底面に回転糸切痕。	青灰	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	

36-29-23	SI-01箇十中	須恵器環	底径 6.4	小型の环身。体部は外方に大きく開く。底面に斜切底部。	外／青灰 内／灰白	胎土：微砂粒をわずかに含む 焼成：良好	口縁部小片
36-29-24		須恵器環	底径 8.0	長い両台が「ハ」の字状に開く。底面に回転系切底部。	浅黄緑	胎土：密 焼成：良好	内面スベ音 相明量に軽用 の可能性大
36-29-25		須恵器環		体部がほぼ垂直に伸び、断面二角形の突帶をもつ。	外／浅黄緑 内／灰白	胎土：1～2mmの砂粒を粗く 含む 焼成：良好	口縁部小片
36-29-26		須恵器環		大型の環。外面上に格子状、内面に同心円状のタタキを施す。	外／綠灰 内／青灰	胎土：1mm以下砂粒含む 焼成：良好	

#### B区出土遺物

種別 出所 番号	山土地点	器種	法盤(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
37-30-27	SI-01	須恵器蓋	口径 17.2 器高 4.1	輪状つまみ。口縁部は唇曲し、端部は内溝気味に下垂する。	灰白	胎土：5.5mmの礫、石英わすかに含む 焼成：不良	つまみ径 6.5cm
37-30-28		須恵器蓋	口径 13.6 器高 2.4	輪状つまみ。切曲する口縁部と下垂する端部をもつ。	青灰	胎土：2mm以下の砂粒含む 焼成：やや良好	つまみ径 4.2cm
37-30-29		須恵器環	口径 12.4 底径 9.3 器高 4.3	体部はやや斜め上方に立ち上がり、端部内面に平凹面をもつ。底面回転系切り後端部アーチ。	外／青灰 内／暗青灰	胎土：密 石英や多量に含む 焼成：やや不良	
37-30-30		土師質甕	口径 24.0	口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめる。口縁部外側にわずかに2本の回り。	黄緑	胎土：わずかに石英含む 焼成：良好	口縁部小片
37-30-31		土師質片		外面縦方向の平行タタキメ	棕	胎土：3mm以下の砂粒含む 焼成：良好	網部小片
38-30-32	SI-02	土師質甕	口径 27.0	口縁部はゆるやかに外反し、端部に半坦部をもつ。外面平行タタキ。内面同心円状のタタキ。	暗褐	胎土：1～4mmの砂粒含む 焼成：やや良好	
39-31-33	SI-04	須恵器蓋	口径 14.2 底径 3.2	輪状つまみ。口縁端部外面に平坦面をもつ。	青灰	胎土：4.5mm以下の砂粒含む 焼成：良好	光背
39-31-34		須恵器蓋	口径 14.9	輪状つまみ。口縁端部がやや外反している。	外／明褐色 内／緑灰	胎土：0.5～1.5mmの砂粒含む 焼成：不良	完存
39-31-35		須恵器蓋	口径 13.4 器高 2.9	輪状つまみで中心がややずれている。	緑灰	胎土：2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	つまみ径 8.6cm
39-31-36		須恵器蓋	口径 14.4 器高 2.2	輪状つまみ。肩部が張り出している。	外／明青灰 内／緑灰	胎土：2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	
39-31-37		須恵器蓋	口径 13.0 器高 3.2	輪状つまみ。肩部で屈曲し、頸部で下垂する端部へと続く。	緑灰	胎土：密 2mm以下の砂粒含む 焼成：やや不良	つまみ径 5.6cm
39-31-38		須恵器蓋	口径 13.0 器高 2.3	輪状つまみ。肩部から口縁部にかけて大きく屈曲し、底を有す。	外／明青灰 内／暗青灰	胎土：密 2.5mm以下の砂粒含む 焼成：良好	つまみ径 4.2cm
39-31-39		須恵器蓋	口径 13.6 器高 2.2	輪状つまみ。天井部が低い。	灰白	胎土：密 2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	つまみ径 4.5cm
39-31-40		須恵器蓋	口径 14.2	比較的薄い輪状つまみをもつ。	明青灰	胎土：1mm程度の砂粒含む 焼成：良好	つまみ径 5.2cm
39-31-41		須恵器蓋	口径 14.0 器高 2.3	輪状つまみ。天井部が低い。	青灰	胎土：密 2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	つまみ径 5.2cm
39-31-42		須恵器蓋	口径 13.8 器高 2.4	輪状つまみ。口縁部にナデによる凹輪状のくぼみをもつ。	明緑灰	胎土：2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	つまみ径 4.4cm
39-32-43		須恵器蓋	口径 13.2 器高 3.5	輪状つまみ。天井部がやや高い。	外／青灰 内／灰白	胎土：2mm以下の砂粒、石英含む 焼成：やや不良	つまみ径 5.1cm

39-44	S1 01	須恵器蓋	口径 13.6 底径 2.8	底面つまみ。肩部で大きく屈曲し、あまり顯著ではない下垂す。 端部へと続く。	外／灰白 内／明青灰	粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：良好	2mm以下の砂粒 含む 焼成：良好	つまみ跡 S.0
39-45		須恵器坏	口径 13.0 底径 8.8 器高 4.1	底面へうおこし。体部は斜め上方に直線状に立ち上がり、端部 灰白 を丸くおさめる。		粘土：密 燒成：良好	粘土：密 燒成：良好	完作
39-46		須恵器坏	口径 13.0 底径 7.5 器高 3.8	底面へうおこし。体部は斜め上方に直線状に立ち上がり、端部 明青灰 を丸くおさめる。		粘土：密 燒成：良好	粘土：密 燒成：良好	
38-47		須恵器坏	口径 13.6 底径 8.4 器高 3.8	底面へうおこし。体部は斜め上方に立ち上がり、端部 灰白 を丸くおさめる。		粘土：密 2mm以下の砂粒 に一部4mmの砂礫含む 焼成：良好	粘土：密 2mm以下の砂粒 に一部4mmの砂礫含む 焼成：良好	
39-48		須恵器坏	口径 13.8 底径 9.0 器高 3.6	底面へうおこし。体部は斜め上方に直線状に立ち上がり、端部 明青灰 を丸くおさめる。		粘土：密 1.5mm以下の砂粒 と4mmの砂礫含む 焼成：やや良好	粘土：密 1.5mm以下の砂粒 と4mmの砂礫含む 焼成：やや良好	
39-49		須恵器坏	口径 13.1 底径 9.2 器高 3.6	底面へうおこし。	灰白	粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：良好	粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：良好	
39-50		須恵器坏	口径 13.8 底径 9.2 器高 4.2	底面回転糸切り。体部は斜め上方に直線状に立ち上がり、端部 明青灰 を丸くおさめる。		粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：やや良好	粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：やや良好	
39-51		須恵器坏	口径 14.0 底径 9.2 器高 3.7	底面へうおこし。口縁部をやや外反させ端部は尖り気味におさめる。	灰白	粘土：密 3mm以下の砂礫含む 焼成：やや不良	粘土：密 3mm以下の砂礫含む 焼成：やや不良	
39-52		須恵器坏	口径 13.5 底径 8.8 器高 3.7	底面へうおこしで高台をもつ。 口縁部をやや外反させ尖り気味の端部へと続く。	明青灰	粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：やや不良	粘土：密 2mm以下の砂粒 含む 焼成：やや不良	
39-53		須恵器坏	底径 10.0	底面回転糸切り。	暗青灰	粘土：密 3mm以下の砂礫含む 焼成：やや不良	粘土：密 3mm以下の砂礫含む 焼成：やや不良	底面から瓶 部にかけての破片
39-54		須恵器坏	口径 13.2 底径 9.2 器高 4.0	底面回転糸切りで高台をもつ。 体部は直線的に延びる。	灰白	粘土：粗 1~2mmの砂粒含む 焼成：良好	粘土：粗 1~2mmの砂粒含む 焼成：良好	
39-55		須恵器坏	口径 12.9 底径 8.0 器高 3.5	底面へうおこしのちナデで高台 をもつ。口縁部をやや外反してい る。	明青灰	粘土：密 1mm程度の砂粒 含む 焼成：良好	粘土：密 3mm以下の砂礫 含む 焼成：やや良好	
40-56		須恵器坏	口径 14.0	体部は斜め上方に直線状に立ち 上がり、端部に平坦面をもつ。 端部直下に凹穂部の凹みあり。	明青灰	粘土：密 3mm以下の砂礫 含む 焼成：やや良好	粘土：密 3mm以下の砂礫 含む 焼成：やや良好	
40-57		須恵器坏	口径 14.0	体部から端部にかけて丸みを帯 びながら立ち上がる。	灰白	粘土：粗 1~2mm程度の砂粒含 む 焼成：不良	粘土：粗 1~2mm程度の砂粒含 む 焼成：不良	
40-58		須恵器Ⅲ	口径 18.0 底径 14.0 器高 1.8	体部斜め上方に短く立ち上がり、 丸い端部へと続く。	明青灰	粘土：密 2.5mm以下の砂礫 含む 焼成：良好	粘土：密 2.5mm以下の砂礫 含む 焼成：良好	
40-59		須恵器Ⅲ	口径 17.0 器高 2.1	体部斜め上方に短く立ち上がり、 丸い端部へと続く。	明青灰	粘土：密 1mm以下の微砂 粒含む 焼成：良好	粘土：密 1mm以下の微砂 粒含む 焼成：良好	
40-60		須恵器Ⅲ	口径 15.4 器高 1.5	体部斜め上方に短く立ち上がり、 端部が薄くなっている。底面へ うおこし。	淡黄	粘土：密 2mm以下の砂礫含む 焼成：良好	粘土：密 2mm以下の砂礫含む 焼成：良好	
40-61		土師器裏	口径 28.0	口縁部はゆるやかに外反し、端 部を丸くおさめる。厚い器壁を有 する。頸部内面ケズリ。	赤橙	粘土：3mm以下の砂礫及び 石英やや多量に含む 焼成：良好	粘土：3mm以下の砂礫及び 石英やや多量に含む 焼成：良好	大型壺
40-62		土師器裏	口径 22.0	頸部はゆるやかに外反し、端 部を丸くおさめる。	にぶい緑	粘土：3mm以下の砂礫及び 石英やや多量に含む 焼成：良好	粘土：3mm以下の砂礫及び 石英やや多量に含む 焼成：良好	
40-63		土師器裏	口径 20.0	短い口縁部をもち、端部はや や外側に膨らむ。	浅黄緑	粘土：1.5mm以下の砂粒含む 焼成：良好	粘土：1.5mm以下の砂粒含む 焼成：良好	
40-64		土師器裏	口径 26.0	口縁部ゆるやかに外反し、頂 部に平坦面をもつ。裏壁やや薄い。 豊頃わずかに肩曲曲する。	外／にぶい緑 内／灰白	粘土：1mm以下の砂粒含む 焼成：良好	粘土：1mm以下の砂粒含む 焼成：良好	奈良
40-65		壺	底径 4.0	体部斜め上方に直線状に立ち 上がり、底部内面に指頭圧痕をし きるもののが認められる。	外／にぶい緑 内／黒褐	粘土：2.5mm以下の砂礫含む 焼成：良好	粘土：2.5mm以下の砂礫含む 焼成：良好	弥生中期後 半の壺の底 部
40-66		製塙土器	口径 26.0	口縁部ゆるやかに外反し、端部 に平坦面をもつ。	浅黄緑	粘土：2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	粘土：2mm以下の砂粒含む 焼成：良好	
40-67		製塙土器		頸部に刺突痕、その下方に1条 の凹線、タチ方向の平行タラキ 目をもつ。	にぶい緑	粘土：1mm以下の砂粒及び 石英含む 焼成：良好	粘土：1mm以下の砂粒及び 石英含む 焼成：良好	内面スヌ付 着

40-33-68	SI-04	須恵器蓋	外面平行タタキメ、内面同心円状のタタキメ	青灰	胎土:密 2mm以下の砂粒 含む 焼成:良好	
40-33-69		須恵器蓋	外面平行タタキメ、内面同心円状のタタキメ	明青灰	胎土:1.5mm以下 の砂粒含む 焼成:良好	
41-33-70	SI-06	須恵器蓋	口径 15.2 底高 2.4 なだらかな天井部をへて、端部 を下垂させている。内外面とも 回転ヘラケズリ後回転ナデ。	明青灰	胎土:密 1mm以下の砂粒 含む 焼成:良好	つまみ径2.6 cm
41-33-71		須恵器蓋	口径 18.2 底高 3.3 貼り付けの輪状つまみをもつ。 内外面回転ナデ。	外/灰白 内/青灰	胎土:粗 3mm以下の砂粒 多く含む 焼成:良好	充存 つまみ径5.2 cm
41-33-72	須恵器蓋	口径 18.2 底高 3.7 輪状つまみがやや中心をはずれ 位置に貼り付けられている。 内外面回転ナデ。	明緑灰	胎土:4mm以下の砂粒及び 粗砂多量に含む 焼成:良好	充存 つまみ径5.0 cm	
41-34-73	須恵器蓋	口径 18.9 底高 3.0 貼り付けの輪状つまみをもつ。 内外面回転ナデ。	明緑灰	胎土:1mm前後の砂粒含む 焼成:良好	つまみ径5.4 cm 大型	
41-34-74	須恵器皿	口径 17.7 底高 14.6 部と体部の境界部分を回転ヘラ ケズリ。	灰白	胎土:細密 約0.1mmの砂粒 含む 焼成:良好		
41-34-75	須恵器環	口径 18.0 底高 4.5 内面は丁寧なヨコナデ、底面は へとおこし。	外/明青灰 内/青灰	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	ほぼ充存	
41-33-76	底部	底径 3.6 平底で、底面中央にφ約4mmの小 孔が穿たれている。外面タテ方 向のタラミがき。	外/暗赤褐 内/黒褐	胎土:3mm以下の砂粒含む 焼成:不良		
41-34-77	住居に伴わな い	須恵器環	口径 14.0 底径 8.4 底高 3.9 体部は斜め上方に直線状に立ち 上がり、丸い端部へと続く。底 面へとおこし。	灰白	胎土:3mmの砂粒及び1mm以 下の砂粒含む 焼成:良好	
41-34-78		須恵器環	口径 14.0 底径 9.0 底高 4.1 体部は斜め上方に直線状に立ち 上がり、丸い端部へと続く。底 面へとおこし。	灰白	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
41-34-79	須恵器環	口径 12.1 底径 8.0 底高 4.1 連刃部の貼り付け高台をもつ。 底面はわずかに内溝している。	青灰	胎土:密 2mm以下の砂粒 含む 焼成:良好		
41-34-80	須恵器環	口径 12.8 底径 9.8 底高 3.9 貼り付け高台。体部は直線的に 外傾し、端部をやや尖り気味に おさめる。底面へとおこし。	灰白	胎土:密 2mm以下の砂粒 含む 焼成:良好		
41-34-81	須恵器蓋	大型型の破片	青灰	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:やわらかい焼き		
41-34-82	須恵器蓋	縦状に胴部が膨らむ。胴部に5条 以上の横線を施す。	外/灰白 内/明青灰	胎土:密 1mm以下の砂粒 含む 焼成:良好		
42-34-83	表様	須恵器蓋	貼り付け輪状つまみ。端部は下 垂している。器形は焼成時に少 しひずみ。やや差なづくり。	明青灰	胎土:~2mmの砂粒含む 焼成:良好	つまみ径6.2 cm
42-34-84		須恵器蓋	輪状つまみを貼り付けている。 肩部で屈曲して鳥嘴状の端部へ と続く。	外/浅黄 内/明青灰	胎土:密 2mm以下の砂粒 含む 焼成:良好	つまみ径5.8 cm
42-34-85		須恵器環	口径 16.0 蓋径 11.0 蓋高 4.5 蓋部端部が上方に反る。立ち 上がり部分にナデによる2段の 凹みがある。	外/オリーブ黄 内/青灰	胎土:密 焼成:良好	山本編年IV 期
42-34-86		須恵器環	口径 14.6 底径 10.4 底高 4.5 底部端部にシッタ痕。底面へと おこし。底部はやや斜め上方に 直線状に立ち上がる。	灰白	胎土:3mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-34-87		須恵器環	口径 12.0 底径 9.0 底高 4.0 高台をもつ。底面へとおこし。	灰白	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-34-88		須恵器環	貼り付け高台。底面へとおこし。	青灰	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-34-89		底部	底径 11.8	灰白	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:やわらかい焼き	
42-34-90		須恵器環	口径 13.4 底径 9.6 底高 4.9 割り出し高台。	青灰	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-35-91		弥生壺	ゆるく「く」の字状に屈曲し、 やや内傾する平坦面をもつ。口 縁部に削り目。	外/褐 内/灰オリーブ	胎土:2.5mm以下の砂粒含む 焼成:良好	弥生中期後 葉

42-36-92	表採	須恵器皿	口径 17.0 底径 13.4 高さ 2.1	体部短く外傾し、端部を丸くおさめる。底部と体部の境界に梗がある。底面へうおこし。	灰白	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	大型
42-35-93		古式上部壺	口径 28.0	平坦面をもつ端部でおさめる。	にぼい褐色	焼成:良好	
42-35-94		弥生直口壺	口径 28.0	口縁部に斜め上方に立ち上がる貼り付け突唇をめぐらす。端部に平坦面をもつ。	オリーブ黒	胎土:1mm程度の砂粒含む 焼成:良好	外画ス付 蓋
42-35-95		土師器壺	口径 23.6	口縁部は強く外反し、端部は今体的に丸いが最頂部をやや平出におさめている。	にぼい褐色	胎土:3mm以下の砂粒わずかに含む 焼成:良好	
42-35-96		須恵器壺	口径 20.0	頸部は「く」の字状に屈曲し、端部を突唇状におさめる。	暗青灰	胎土:微砂粒わずかに含む 焼成:良好	
42-35-97		土師器壺	口径 23.4	口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめる。器壁は厚い。	浅黄褐	胎土:4mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-35-98		土師器壺	口径 22.0	口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。やや難な仕上げ。	外／赤褐 内／棕	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-35-99		上部器	口径 22.0	口縁部ゆるやかに外反し、端部を丸くおさめる。頸部の器壁は比較的厚い。	にぼい褐色	胎土:4mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-35-100		土錐	厚さ 2.3 抜き 3.7 孔径 0.6	円錐型。	浅黄褐	胎土:1.5mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
42-35-101		土錐	長さ 4.5 厚さ 2.2 孔径 0.7	円錐型。やや長手。	浅黄褐	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
43-35-102	上部器	上部器	口径 29.0	口縁部わずかに外反し、端部を丸くおさめる。頸部の器壁は厚い。底部以下ハラケヅリ。	外／灰白 内／にぼい褐色	胎土:3mm以下の砂粒及び 石英含む 焼成:良好	
43-36-103		須恵器壺		外面タテ方向の平行タタキメ。内面同心円状のタタキメ。	灰白	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:やや不良	
43-35-104		弥生壺		外面続刺突列状文後細いハケメまたはナデ。	灰褐	胎土:2mm以下の砂粒やや 多量に含む 焼成:良好	
43-35-105		土師器壺		外面肩上部よりタタハケメ。	にぼい褐色	胎土:3mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
43-36-106		須恵器壺	口径 10.6	蓋付きの蓋と考えられる。口縁部は大変短い。	外／明青灰 内／灰白	胎土:1~3mm程度の砂粒含む 焼成:良好	内面一部に 鉄馳らしき ものが付着
43-35-107		須恵器壺	頸径 10.6	頸部は球形と考えられる。	外／灰白 内／青灰	胎土:4mm以下の砂粒含む 焼成:良好	
43-36-108		須恵器壺	頸径 18.2	口縁部外反し、肩部は張り出す。外面肩上部より同心円状のタタキメ。	青灰	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	大型
43-35-109		須恵器壺	頸部 17.8	頸部は「く」の字状に屈曲する。	外／青灰 内／暗青灰	胎土:3mm以下の砂粒わずかに含む 焼成:良好	
44-37-110	SK-31	須恵器壺		比較的の器壁が薄い。	外／灰褐 内／明灰褐	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	小兎塚より 出土

## 出土陶器

地図 図版 番号	出土地点	器種	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調	胎土・焼成	備考
45-38-111	B区	肥前系縦林、口保	40.0	くし抜工具により内面全体に掃り目が刻まれている。内外面とも施錆		胎土:1mm程度の砂粒少 含む 焼成:良好	17C後半~19 C
45-38-112		備前窯		丸い端部をもち、外面が突堤状になる。	黒暗緑	胎土:密 焼成:良好	江戸
45-38-113		縦林		内尚気味に拡張された口縁部をもち、外面に凹線をめぐらす。外周端部附近に2条の凹線。	赤	胎土:密 2mm以下の砂粒 含む 焼成:良好	江戸
45-38-114	B区	碗		体部から口縁部にかけてやや内尚している。	内外/青白 染付/黒	胎土:緻密 焼成:良好	16~17C
45-38-115	A区	香炉	口径 12.0	青緑	明緑灰	胎土:細密 焼成:良好	
45-38-116	B区	伊万里窯		口縁部外反し、端部を丸くおさめる。口縁内面に2条の凹線。	内外/青白 染付/にぼい藍	胎土:密 焼成:良好	18~19C
45-38-117	A区	碗		体部斜め上方に直線状に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	内外/灰 染付/暗緑	胎土:密 焼成:良好	江戸
45-38-118		瀬戸窯		天目系窓の口縁片。	黒、にぼい緑	胎土:密 焼成:良好	16C
45-38-119		肥前系縦林		全面的に櫛目。	外/褐 内/明緑	胎土:密 焼成:良好	
45-38-120		碗		体部や内碗している。	外/明緑灰 内/緑灰	胎土:密 焼成:良好	18C後半
45-38-121		備前底部	底径 16.0	外面タテハケ後ヨコナデ。内面ヨコナデ。底面ハケ後ナデ。	外/褐灰 内/灰	胎土:密 焼成:良好	
45-38-122		伊万里窯	口保 7.0	体認ゆるやかに外反し、シャープな丸い端部へと続く。	内外/緑灰 染付/藍	胎土:緻密 焼成:良好	江戸
45-38-123		唐津皿	底径 4.4	低い高台をもつ。高台は丸みを帯び、内外面に段をもつ。	外/にぼい緑 内/灰オリー	胎土:1mm以下の砂粒含む 焼成:良好	17C前半
45-38-124		碗		薄い施釉。高台の先端はやや尖っている。	外/にぼい緑 内/緑灰	胎土:2mm以下の砂粒少 含む 焼成:良好	
45-38-125		伊万里皿	底径 3.8	小皿	内外/灰白 染付/薄緑灰	胎土:密 焼成:良好	18C
45-38-126		碗	底径 5.0	どっしりとした高台を有す。	外/にぼい緑 内/にぼい緑	胎土:2mm以下の砂粒含む 焼成:良好	江戸
46-39-127		伊万里窯	口保 10.0 底径 2.8	輪状つまみ。	内外/青白 染付/にぼい藍	胎土:緻密 焼成:良好	19C前半
46-39-128		肥前系碗	口保 8.2 底径 3.0 器高 5.0	小さい高台をもつ。体部や内側氣味の立ち上がり、端部を丸くおさめる。	青白	胎土:緻密 焼成:良好	19C
46-39-129		伊万里窯	底径 7.4	色鮮やかなスタンプ。高台内にジャーナメ式に段があり、見込みの中央が盛り上がっている。	青白	胎土:精良 焼成:良好	19C
46-39-130		伊万里窯	底径 6.7	高い高台を有す。	内外/青白 染付/濃藍	胎土:緻密 焼成:良好	19C前半
46-39-131		古伊万里皿	底径 4.8	削りだし高台。	内外/明緑灰 染付/にぼい藍	胎土:緻密 焼成:良好	17~18C
46-39-132		古伊万里皿	底径 7.4	削りだしの低い高台をもつ。	内外/明緑灰 染付/薄藍	胎土:緻密 焼成:良好	17C
46-39-133	B区	備前縦林	口径 26.0	口縁部内縮している。	灰	胎土:密 焼成:良好	14C

46-39-134	A区	口縁部	口径 18.0	中国青磁。玉縁をもつ。	灰オリーブ	胎土:緻密 焼成:良好	中世
46-39-135		皿	口径 12.0	青磁。体部や丸みをもち外傾し、外反する口縁と丸い端部でおさめる。	灰オリーブ	胎土:緻密 焼成:良好	中世
46-39-136		碗		中国青磁。体底緩やかに外反し、丸い端部へと続く。	明暦灰	胎土:緻密 焼成:良好	15C
47-39-137	B区	須恵質		内面ヨコナデ。	外/黒 内/青灰	胎土:密 2mm以下の砂粒 含む 焼成:良好	古代末～中世
47-39-138	A区	青磁擂鉢		6条以上の縒り目。	灰	胎土:2mm以下の砂粒及び6mmの砂粒含む 焼成:良好	
47-39-139	B区	青磁擂鉢		5条以上の縒り目。	灰	胎土:密 焼成:良好	
47-40-140		骨壺	底径 12.4	底面はやや横円形。	外/オリーブ 黒、暗褐色 内/によい褐色	胎土:3mm以下の砂粒含む 焼成:良好	江戸～明治
47-40-141		鉢		青磁。高台付きと思われる。シノギ・輪進弁文。	オリーブ灰	胎土:緻密 焼成:良好	
47-40-142	A区 Sx-e2	擂鉢	口径 25.5	口縁部や外傾し、端部に丸みをもつ。	黄灰、淡黄	胎土:4mm以下の砂粒含む 焼成:不良	風化が著しい
47-40-143	B区	鉈	口径 5.2	口縁部丁寧なナデを施しており、段くなっている。	外/黒、灰白 内/黒、灰オリーブ	胎土:密 焼成:良好	
47-40-144		鉢	口径 29.0 底径 9.4	削りだし高台。口縁部外反し、端部は太く丸みをもつ。	灰白		
47-40-145	A区	仏華瓶	口径 9.0	青磁釉を施す。	明暦灰	胎土:緻密 焼成:良好	江戸

#### 出土石器・鉄製品

図版 番号	出土地点	種類	法長(cm)	形態・手法の特徴	備考
48-41-146	A区	磨石			
48-41-147	A区SI-01	鍔懸		病の一部と刃部片と思われる。刃は片刃で刃角は大きく、突き鑿と思われる。 身の断面は長方形。	鍔の付着が少なく、保存状態はよい。
48-41-148	A区	磨石		平坦な面(両面)に磨り跡が認められる。	
48-41-149	B区SI-06	石斧	器長 約11.8 刃幅 約 5.7 厚さ 約 1.2	短柄形の磨製石斧。	
48-41-150	B区	鉄斧	器長 約7.8	小型の袋状鉄斧。袋部には柄の先端が残る。刃は欠けているが片刃と判断される。	鍔の付着が少なく、保存状態はよい。
48-41-151	B区SI-06	石鎌	器長 約2.3 刃幅 約1.5	無茎鎌。材質はサツカイトと思われる。	

## 付論

### 『清源那近世墓から検出された人骨について』

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上貴央・影岡優子・土井浩二

# 付論 清源那近世墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井上貴央・影岡優子・土井浩二

## 1. はじめに

島根県邑智郡石見町井原の清源那遺跡の近世墓から人骨が検出された。人骨は保存が良好であるとはいはず、計測に耐える骨はなかった。人骨に伴って纖維状物質が検出され、検討の結果、毛髪と同定できた。本稿では検出された骨の概略と毛髪について概説する。

## 2. 検出人骨の記載

### 1) B区SK-02の人骨

方形の土壌から検出された骨である。土壌の北隅から頭蓋骨が、土壌の南半分から下肢骨が検出されている。

上顎の南東隅から骨盤が、東側から交連状態の椎骨が検出されている。左下肢は右下肢より上面で検出されており、左の膝関節は、屈曲した状態で大腿骨と脛骨が膝関節ではなく連続して検出されている。

頭蓋骨はほぼ完存しているが破損が大きく接合できない。前頭部はよく膨隆しており、眉弓、眉間は平坦である。また、乳様突起は小さい。これらの特徴は本頭蓋が女性骨であることをうかがわせる。

頭蓋の三主縫合をみると、冠状縫合の外板は未閉鎖であるが、内板ではやや融合閉鎖が進んでいる。矢状縫合は内板、外板ともに未閉鎖である。切歯縫合はやや融合閉鎖が進んでいる。

上顎・下顎ともにほぼ完存している。下顎は大きく二つに割れている。前歯部に破損があり、前歯部の歯牙は遊離歯の状態で検出された。そのほかの歯牙は歯槽に釘植していた。上顎・下顎の第3大臼歯は萌出しているものの完全には萌出を完了していない。咬耗度は Martin の1-2度である。本頭蓋の歯式は次の通りですべての歯牙がそろっている。

M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>
M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub>	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>

脊柱の骨では、胸椎片が検出されているのみである。骨盤の骨では、左右の寛骨が検出されている。右寛骨は細片化しており、その形態は不明である。左寛骨は坐骨切痕の部分が残っており、その幅が広いことから、女性の骨盤の一部であると考えられる。上肢骨の骨では左鎖骨片が同定できたのみである。上肢骨では左右の上腕骨片、右側の橈骨と尺骨が同定できた。下肢骨では、両側の大転骨と脛骨、右の腓骨が検出されている。四肢骨は近位・遠位の骨端が壊っているものではなく、骨の最大長は測定できない。したがって、被埋葬者の身長推定は不可能である。

本人骨は骨の形態学的特徴から考えて、女性骨であると推定され、歯牙の萌出状況や縫合の閉鎖状況から考えて、年齢は壮年前半と考えられる。

骨の検出状況から判断して、本人骨は頭部を北東に置き、西を向いて横臥位で膝を曲げて埋葬されていたものと考えられる。

## 2) B区SK-03の人骨

方形の土壙墓の中央より、やや南よりから頭蓋骨が、北東隅から椎骨が検出されている。北西からは右下肢骨が、南西からは左下肢骨が検出されており、坐位で両膝を左右に広げたような状態である。

頭蓋は破損が大きく、頭形を知ることはできない。残存している部位は前頭骨の一部、左右側頭骨から後頭骨にかけての部分、左右の頭頂骨片である。前頭部の形態は不明であるが、乳様突起はよく発達しており、外後頭隆起も比較的よく発達している。

三種縫合の閉鎖状況をみると、外板は未閉鎖であるが、内板ではほとんどの部分が癒合閉鎖をきたしている。

頭蓋冠は全体的に厚い。顔面頭蓋では破損が大きく、眼窓や鼻部の形態は不明である。上顎骨は左側は検出されているが、右側は検出されていない。左上顎は第2大臼歯が釘植しているのみで、ほかの歯牙は脱落しており、歯槽は癒合閉鎖をきたしている。下顎骨は右下顎枝を欠くが、ほかはほぼ完存している。下顎の大部分の歯牙は脱落して、歯槽が癒合閉鎖をきたしており、残存する歯牙は少ない。咬耗度は Martin の1-3度であるが、脱落歯牙が多いため咬耗度は年齢査定に用いにくい。左上顎第2大臼歯の頬側面に3度のカリエスが認められた。本頭蓋の歯式は次の通りである。

欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	欠	閉	閉	閉	閉	閉	M <sub>2</sub>	閉
閉	閉	閉	閉	閉	閉	I <sub>2</sub>	閉	閉	閉	C	閉	閉	閉	閉

脊柱の骨では、環椎、軸椎、胸椎が4個検出されている。胸椎は骨棘形成が著明で、変形性脊椎症の所見を呈している。肋骨はほぼ現位置から多数検出されている。骨盤の骨では、坐骨切痕の部分が検出されており、その幅が狭いことから、男性の骨盤の一部であると考えられる。上肢帶の骨では右肩甲骨片と鎖骨片が同定できたのみである。上腕骨では左右不明の上腕骨、左上腕骨、左尺骨が検出されている。下肢骨では、両側の大腿骨、脛骨、腓骨が検出されている。四肢骨は近位・遠位の骨端が揃っているものではなく、骨の最大長は測定できない。したがって、被埋葬者の身長推定は不可能であった。

本人骨は骨の形態学的特徴から考えて、男性骨であると推定され、歯牙の萌出状況や縫合の閉鎖状況から考えて、年齢は熟年後半～老年と考えられる。

本人骨は、骨盤を横穴の中央部付近に置き、西を向いて膝を曲げた状態で坐位で埋葬されたものと考えられる。

### 3. 毛髪の同定

B区SK-02の頭蓋骨から若干離れた位置から線維状構造物が検出された。その詳細は別章に述べられているが、この線維状遺物は大きな繩のような編み目が認められ、頭髪には直接付着していなかったことから、頭髪とは即断できず、植物纖維による何らかの遺物の可能性も否定できなかった。

この線維状構造物を同定するため、光学顕微鏡的および走査型電子顕微鏡的観察法とX線微小分析法を用いて検討した。

表面を走査型電子顕微鏡で観察した結果、表面には比較的平滑な層が認められ、

毛髪に特徴的な毛小皮のうろこ状構造は認められなかった。表面には劣化・腐食によるものと考えられる穴や亀裂が多数認められ、内部には長軸方向に走る線維束が観察できた。また線維の内部は空洞状になっているのが多数認められた。試料に含有される元素を測定した結果、炭素・酸素の他に高濃度の硫黄が検出された。このことは、線維状構造物が植物纖維ではなく、硫黄を多く含む毛髪であることを物語っている。内部の空洞構造は毛髪に相当するものと考えられた。毛皮質には細管構造が観察された。埋葬された人間の頭髪において、真菌が菌糸を頭髪内に伸ばし、主として毛軸方向に垂直にトンネル状の空洞を作る例が報告されているので、本例も真菌汚染があったものと考えられる。

今回試料がヒトの頭髪であるか、動物の体毛であるかの同定はできなかった。風化作用によって毛小皮構造が失われており、また毛髪も腐食が著しいため、毛髪質と皮質の割合が算定できず、種の同定は困難であった。しかし、本例では試料が頭蓋骨の近傍から検出されていることからヒトの頭髪であると推測した。

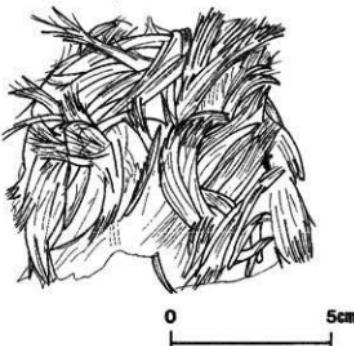
### 4. 謝辞

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた島根県邑智郡石見町教育委員会の関係各位に厚く御礼申し上げる。

### 5.まとめ

1) B区SK-02には壮年女性が埋葬されていた。埋葬肢位は西を向いた横臥位であった。また、毛髪の一部が確認できた。

2) B区SK-03には熟年後半～老年の男性が埋葬されていた。埋葬肢位は西を向いた坐位であった。人骨には、カリエス、変形性脊椎症が認められた。



毛髪実測図

# 図版

図版 1



a. 上空から見た調査地周辺



b. 同 調査対象地全景



a. A区発掘前全景



b. 同 T1土層断面

図版 3





a. 同 遺物出土状況  
(南から)



b. 同 遺物出土状況近景  
(西から)



c. 同 高坏出土状況

図版 5



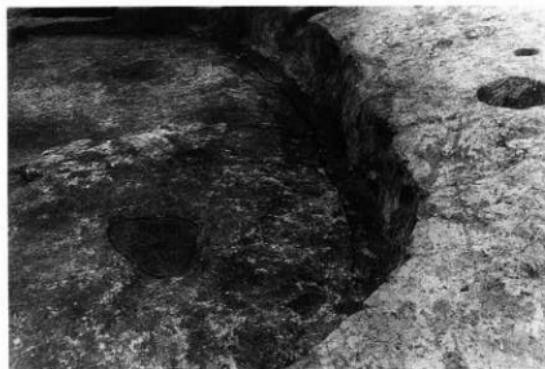
a. 同 鉄型出土状況



b. 同 瓦出土状況



c. 同 壁溝・P1・P2  
検出（北西から）



a. 同 壁溝・柱穴検出  
近景 (南西から)



b. A区SB-01近景  
(北東から)



c. A区SI-01  
SB-01  
(北西から)





a. 同 土層断面  
(西から)



b. A区 SD-02 棟出  
(北東から)



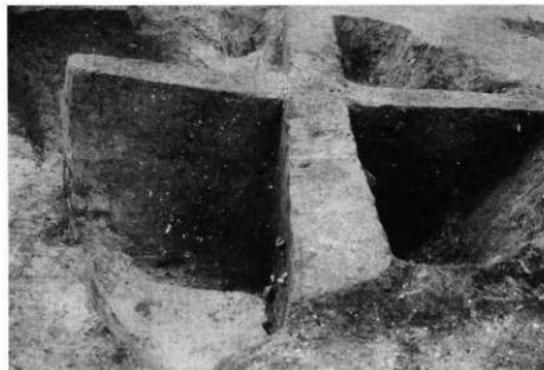
c. 同 土層断面  
(北東から)

図版 9





a. 同 遺物出土状況



b. A区 SX-03  
土層断面



c. 同 完掘 (北西から)

図版 11

a. A区 SX - 0 4  
土層断面



b. 同 完掘 (北西から)



c. A区調査後全景  
(北から)





a. B区 2段目東側  
土層断面



b. 同 西側土層断面



c. B区 S1-01検出  
(北西から)

a. 同 土層断面  
(北東から)



b. 同 遺物出土状況



c. 同 須恵器出土状況





a. 同 煙道中  
遺物出土状況



b. 同 煙道調査中  
(南東から)



c. 同 完掘 (北西から)



a. B区S 1 - 02  
遺物出土状況(南から)



b. 同 遺物出土状況  
(東から)



c. 同 完掘(北から)



a. B区3段目調査中全景  
(南東から)



b. 同 全景 (北東から)



c. B区S1-03  
煙道検出



a. 同 調査中(北西から)



b. 同 完掘近景(北から)



c. B区SI-04検出  
(北西から)



a. 同 遺物出土状況  
(北西から)



b. B 区 S I - 0 5 調査中  
(北から)



c. 同 焼土近景

図版 19

a. B区S I - 0 6  
(西から)



b. 同 遺物出土状況近景



c. 完掘近景 (西から)





a. 同 床下石斧出土状況  
(北西から)

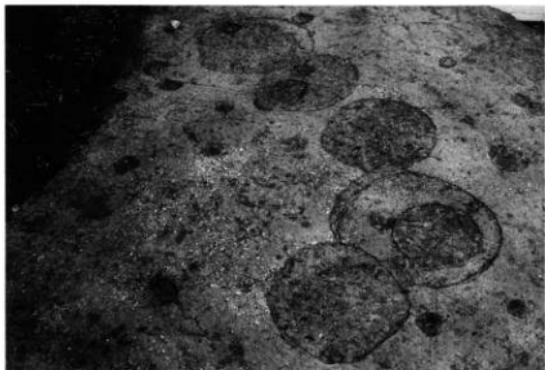


b. 同 床下石斧出土状況  
近景



c. 同 北斜面鐵斧出土状況  
近景

a. B区1段目土壤墓検出  
(東から)



b. B区SK-19検出  
(南から)



c. B区SK-18  
河原石出土状況

